筑波大学新聞

第336号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

## 注目記事

睡眠障害の治療に光　2
フォルク演奏会　5
男子ハンド２連覇　8
女子バレー 優勝　9
粗大ゴミ置場にカメラ　10
イノフェス 開催　11

## ミニ特集　3

やどかり祭
熱気あふれる２日間

華麗に舞う「ゆかコン嬢」

## 特集　6,7

「大学と軍事研究」アンケート

### 学内に設置の期日前投票所

# 利用率低く閉鎖も

筑波大学生らの求めで昨年7月の参院選以降、筑波大の中央図書館に設けられた期日前投票所の投票者数が、一日平均で参院選147人、同11月のつくば市長・市議選130人と、市内のほかの8投票所の投票者数（参院選180人、市長・市議選471人）を下回ったことが、同市選挙管理委員会への取材で分かった。同図書館の期日前投票所は「利用者に学生の姿が少なかった」（同選管）ともいう。今後も投票者数が少ない場合、同投票所は閉鎖の可能性もあり、同選管は学生に利用を呼びかけている。

（石川泰行＝社会学類3年、4面に記者の声）

期日前投票所を利用する学生（昨年6月27日、中央図書館で）＝大西美雨（社会学類4年）撮影

通常、期日前投票所は参院選で16日間、市長・市議選では6日間、投票日前日の土曜日まで設置される。用時間は、ほかの市内のほが、中央図書館内の投票所は両選挙とも投票日前の火曜・木曜の3日間設置。利とんどの期日前投票所よりも2時間短い、午前11時～午後7時で、市民なら誰でも利用できた。

同選管によると市内に住民票がある筑波大生は5～6000人で、昨年6月から選挙権年齢が18歳に引き下げられ、全員が選挙権を持つ。だが、同選管の田中千晴事務局長によると「期日前投票所がある中央図書館の周辺には学生が多く住むが、外見などから（両選挙とも）利用者は学生が少なく、大学職員とみられる人などが多かったという。

また、両選挙の投票率は、市全体では参院選で51・38％、市長・市議選で53・31％だったが、天久保、天王台、桜、春日など筑波大生が多く住む地域が対象となる3投票所での投票率は、14ポイント～36ポイント低かった。

田中事務局長によると、同図書館内の投票所は平成31年度まで開設予定だが、投票所設置には費用がかかり、利用者数が伸び悩む場合、平成32年度以降の閉鎖の可能性もあるという。

同選管は今後、筑波大生に期日前投票所の存在をアピール、利用者増を目指す。

田中事務局長は「筑波大生には、まず住民票をつくば市に移したうえで地域や政治に関心を持ち、期日前投票所を積極的に利用してほしい」と話している。一方、同図書館の期日前投票所の期間延長は「投票日（日曜日）前の土日にも開設するとなると、大学側との調整もあり難しい」という。

同選管によると、同市内の有権者数は両選挙ともに約17万5千人。うち筑波大中央図書館を含め同市に9カ所設けられた期日前投票所の利用者は、両選挙ともに計約2万4千人だった。

同図書館の期日前投票所は、昨年4月から筑波大生らが市に設置を働きかけ、実現していた。

撮影・小宮山瑛生＝社会学類3年

## J1チーム破る

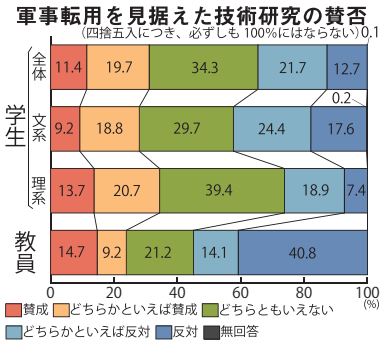
### 蹴球部　ベスト32進出　天皇杯

天皇杯2回戦が6月21日にユアテックスタジアム仙台（仙台市泉区）で行われ筑波大はベガルタ仙台を3－2で下した。次戦は7月12日、ケーズデンキスタジアム水戸（水戸市）でアビスパ福岡と。（8面に関連記事）

### 軍事研究アンケート

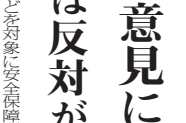
# 学生と教員で意見にずれ

## 教員は反対が多数




防衛省が大学などを対象に安全保障関連の研究に資金の拠出を始めたことを機に大学と軍事研究の関係が問われる中、筑波大学は3月、軍事研究を否定する方向での指針作りに着手した。これらを受け、本紙は日本の大学による軍事転用を見据えた技術研究の是非を問うアンケートを実施。学生798人、教員184人から返答があった。その結果、学生は賛成派が31・1％（248人）、反対派が34・4％（274人）と意見が拮抗。一方、教員は反対派が54・9％（101人）で賛成派23・9％（44人）を大きく上回り、学生と教員の意識の相違が浮き彫りになった。

（添島香苗＝生物科学専攻1年、6、7面に関連特集）




アンケートは5～6月に実施。「反対」「どちらかといえば反対」と回答した「反対派」の学生が74人、教員101人に複数回答で理由を聞くと、「大学は学問の場で、軍事とは切り離すべきだから」が学生53・8％（147人）、教員75・2％（76人）と最多だった。また「賛成」「どちらかといえば賛成」の「賛成派」の学生248人、教員44人が選んだ最多の理由は「軍事につながることを恐れていたら、民生用の研究も自由にできなくなるから」で、学生58・5％（145人）、教員54・5％（24人）だった。

一方、学生の結果を文系、理系別に見ると、回答した理系（381人）のうち賛成派は34・4％（131人）で、反対派の26・3％（100人）を上回った。文系（414人）では賛成派28・0％（116人）、反対派42・0％（174人）で、文理で賛否が逆転した。

このほか教員では、年齢が上がるほど軍事研究への反対派が多くなる傾向があった。40代（58人）では賛成派が29・3％（17人）、反対派が46・5％（27人）だったのに対し、60代以上（22人）では賛成派が9・2％（2人）で、反対派77・2％（17人）と大きな開きがあった。

本紙では、2015年11月にも筑波大生600人に同様のアンケートを実施。この時は、大学の軍事研究に「賛成」「どちらかといえば賛成」と回答した賛成派は33・5％（201人）で、「反対」「どちらかといえば反対」の反対派27・4％（164人）を上回った。また文系、理系別で見ると、40代（267人）のうち、賛成派は42・0％（112人）、反対派は21・8％（58人）。文系（331人）では各26・8％（89人）、32・1％（106人）だった。

防衛省の資金拠出制度は15年に開始。これまでに北海道大、東京農工大など計9大学の研究が採択された。これに対し、戦後軍事研究を否定してきた日本の科学者の代表機関・日本学術会議は3月、この立場を継承していくことを決定。筑波大も、軍事研究を否定する方向で指針作りに動き出している。

# 1A棟 工事で一時閉鎖

### 来年5月まで　支援室は移転、食堂は休業

第一エリアの中心に位置する1A棟で、9月から耐震・改修工事が始まることが施設部や学生生活課などへの取材で分かった。この影響で同棟にある2支援室が一時移転するほか、食堂や書籍部などの厚生施設は来年5月ごろまで休業する。

（秋田耕平＝社会学類2年、2面に関連記事）

9月から耐震・改修工事が実施される1A棟（6月16日、第一エリアで）＝木村誠撮影

1A棟は開学から2年後の1975年に完成。人文社会エリア、数理物質エリアの支援室があるほか、食堂や書籍部なども併設している。だが完成から30年以上が経過し、施設部が2006年に実施した耐震診断では建築基準法の定める耐震強度よりも低いことが判明。これに加え、配管など設備の老朽化も著しく、全棟を一時閉鎖し、大規模な改修工事を実施することになった。

今回の工事では地震備えの鉄骨による補強などを行うほか、スロープの設置や通路拡張などでバリアフリー化を行う。また、1階第一エリアに常設の飲食店がなくなることから、厚生施設を管理する学生生活課では業者による1A棟周辺での弁当販売も検討。同時に、松美池前のキッチンカーの台数を増やすことも検討している。

1階へそれぞれ移転する。また、学生交流課は大学会館2階へ場所を移す。

一方、食堂や書籍部などの厚生施設は春Cモジュール終了の8月上旬まで営業後、工事が終了する来年5月まで休業となる。休業中、厚生施設を管理する学生生活課では業者による1A棟周辺での弁当販売も検討。同時に、松美池前のキッチンカーの台数を増やすことも検討している。

の食堂は客席の面積も増やす方針だ。

工事に先立ち、8月中旬から人文社会エリア支援室は総合研究棟B近くのプロジェクト研究棟へ、数理物質エリア支援室は1E棟1階へそれぞれ移転する。また、学生交流課は大学会館2階へ場所を移す。

## 筑波おろし

「島根県ってなにもないんでしょ」。筑波大学に入学以来、島根県出身と言えば返ってくるのがこの一言だ。確かに人口は70万人を切り、日本で2番目に少ない。だが、愛する郷里への「なにもない」という放言は聞き捨てならない▼県西部の人口約3000人の町で育った。小中学校は全校で約50人。最寄り駅までは車で30分で、コンビニは町に1つだけだ。都会的な豊かさは皆無。「なにもない」と言う友人が町を見れば、「やっぱりなにもない」と言うのだろう▼だが故郷を「なにもない」と思ったことは一度もない。町民はみんな顔見知り。緑豊かな道で、町の人々とあいさつを交わすのは日常茶飯事だ。「みんなで食べて」と収穫直後の野菜や果物をもらうことも多い。町に「あるもの」は数えきれない▼安倍晋三首相が2014年の所信表明演説で「地方創生」を掲げた際、成功事例として島根県隠岐諸島の海士町を紹介した。同町のスローガンは「ないものはない」。町の伝統食「さざえカレー」の販売数は、全国で年間2万食。「島留学」制度で町の高校には日本中から生徒が集まる▼要は考え方の問題なのだ。逆説的だが、都会的に「ないもの」の中に、「あるもの」があると思う。それを考えることが「地方創生」だとも。今度、島根には「なにもない」と言われたときは、島根に「あるもの」の話をしてみよう。

# 老朽化する施設の現場

## 築 25 年以上の建物 半数超が未改修

### 雨漏りの跡、ひび目立つ

【1面参照】1A棟の耐震・改修工事が9月から実施される。筑波大学の施設は1973年の開学から10年ほどの期間で多くが建設されたため、老朽化が進んでいることが考えられる。1A棟を中心に各建物の現場を見た。（秋田耕平、写真も）

第一エリア食堂は柱と給茶機の間や座席間が狭く、一部は車椅子の通行が難しい（7月3日、1A棟で）

**■天井に茶色いしみ**

1A棟。外から見るとひび割れなどもなく、問題があるようには見えないが、中に入ると2階・書籍部のひび割れを樹脂製のモルタルで埋めた跡が見られた。

1階の食堂は、窓から離れると薄暗い印象だ。座席間の通路の幅を測ると、狭いところで65㌢だった。これでは車椅子の幅（55～65㌢）を考慮すると、通ることは難しい。また、階段の幅は135㌢と、2006～07年に改修された1D棟の階段（幅150㌢）と比べると狭く、食堂に通じる階段の手すりはさび付いていた。

1A棟の向かい側の1C棟。10年にトイレの改修が行われたが、教室や廊下などは未改修だ。廊下のタイルを見ると割れたり、欠けている場所があった。

いくつかの教室に入ると、天井には茶色いしみが見られた。施設部に聞くと、壁には水平に70㌢ほど入ったひび割れの痕跡があった。ペンキで塗られているため、直接ひび割れは確認できなかったが、奥にはひび割れを樹脂製のモルタルで埋めた跡が見られた。

1C棟では、雨漏りが原因で天井がはがれかけていた（7月1日、1C棟で）

雨漏りの跡だという。「大雨が降ると雨漏りの修理依頼の電話が増える」（施設部）という。

座席が固定されている教室に入った。教室の席は背もたれがくっついており、座席は独立していない。このため座席間の間隔はほとんどなかった。これは改修済みの1D棟の同様の教室とは大きく違っており、1D棟の場合、一つひとつの座席が独立。その間隔も測ると15㌢あった。

1C棟のこの教室を授業で使うある男子学生は「隣の座席と近過ぎ、受講者数の多い授業では圧迫感がある。前後の間隔も狭いため座るのも苦労する」と話していた。

一方、07～08年にかけ耐震・改修工事が行われた3A棟。教室などには、工事で設置された耐震用の鉄骨がある。1A棟や1C棟のようなひび割れや雨漏りの跡などはなく、白を基調とした壁に明るい印象を受けた。

### 大規模改修は補助金頼み

**■少ない補助金**

施設部によると、1A棟のように完成から25年以上が経過し、改修が必要な筑波キャンパスの建物は16年の時点で計622棟あったが、うち平成28年度末に改修が完了した建物は216棟と半数以下。また、文部科学省が定める教育施設の耐震基準を上回る施設の割合は、全体で約91%と全国平均の97・9%を下回っている。

今年度は1A棟と同様の耐震工事が医学食堂や附属病院のB棟などで予定されるほか、1H棟ではトイレの改修工事が計画されている。

ただ、施設整備の資金確保は難しい。雨漏りや窓ガラスの破損などの日常修繕は学内経費で対応しているが、耐震工事などの大規模改修は文科省の施設整備の補助金で賄われている。だがこの補助金も多くはない。施設部によると、今年度に全国の国立大学法人などが文科省に要求した新規の補助金は約737億円。だが実際に予算化された額は約177億円と約4分の1だ。

施設企画課の三好毅課長は「限られた予算なので、優先度の高いものから工事を進めている。耐震化の完了を目指す一方で（予算不足だが）使いやすくするための改修工事を毎年度少しずつでも行う必要がある」と語った。

---

留学フェア

### 世界の文化や留学制度を紹介
### 石の広場に学生集う

留学制度の説明や世界各地の文化を紹介するイベント「Co Abroad！2017春季留学フェア」が5月17日、石の広場で開催され、学生300人以上が訪れた。

同イベントは留学を推進するグローバル・コモンズ機構、国際室、教育推進部SGU推進室、学生部学生交流課が共同で企画。留学制度などを説明するブースでは、利用できるプログラムや奨学金の制度などの疑問に職員が個別に答えた。

地域の文化を紹介するブースで、興味を寄せる学生ら（5月17日、石の広場で）

来場した学生は「筑波大学は（留学の）プログラムや支援体制が充実しており、さまざまな国へ留学できると感じる。多くのプログラムについて情報を得られたので、留学先の決定の参考にしたい」と話した。

イベントを主催した河瀬眞琴グローバル・コモンズ機構国際交流支援部門長は「こうしたイベントを通して留学についての理解がより深まってくれればうれしい」と話した。（小宮山瑛生＝社会学類3年、写真も）

また、会場には東アジアやヨーロッパなど地域ごとの文化を紹介するブースも設けられ、留学生らとの交流も行われた。中南米のブースでは民族衣装に身を包んでの写真撮影も行われた。

---

### 睡眠障害を抑える物質確認
### 「ナルコレプシー」の根本治療へ

柳沢正史機構長

筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構（柳沢正史機構長）の研究チームは、同機構内で開発した化合物「YNT-185」に、日中に強い眠気を生じる睡眠障害「ナルコレプシー」の症状を抑制する効果があることを確認した。この発見で、睡眠障害の原因に直接作用し、副作用の少ない治療薬の開発が期待されるという。

ナルコレプシーは脳内で作られる物質「オレキシン」の欠乏で発症。患者は十分な睡眠をとっていても、日中に突然強い眠気に襲われたり、笑いや怒りなどの急激な感情の変化によって、突然、脱力してしまうなどの症状が現れる。

柳沢機構長らは1999年にナルコレプシーが起きる仕組みを解明。だが、根本的な治療薬は未開発だった。そのため、治療は眠気などの各症状に対する薬だけで、ひどい吐き気や頭痛などの副作用があった。

同機構によるとこれはオレキシンを薬の成分に利用することが困難であることが原因。口からオレキシンを摂取しても、胃で分解されるほか、オレキシンを注射しても「血液脳関門」と呼ばれる外来物質の脳への取り込みを避ける仕組みがあり、脳に到達しなかった。

そこで、研究チームはオレキシンと同じ働きを持つ化合物「YNT-185」を開発。マウスでの実験で、この化合物が脳内に取り込まれ、ナルコレプシーの症状が改善することが確認された。

柳沢機構長は、「YNT-185は吸収効率などが悪く、まだ課題も多い。すぐ実用化することは難しいが、そのための筋道が確認されたと話している。（岡田優太＝社会学類3年、南圭＝教育学類1年）

---

### 学生が企画を提案
#### 海外武者修行支援プログラム

筑波大学生の海外での活動を支援する本年度の「海外武者修行支援プログラム」の選考会が6月2日に本部棟で行われ、海外での自主的な研修活動や学生間文化交流などの応募企画24件のうち、18件が採択された。

プログラムは平成27年度から開始した「海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）」の一環。学生らが海外で行いたい交流・研究活動を企画、提案し、選ばれた場合、1企画に上限200万円が支払われる。現地での活動期間は2週間以内。選考会では、各企画の提案者が現地での活動目標などを副学長ら審査員11人に発表。審査員らは活動予定の詳細などを質問していた。

選考会では、各団体が自身の企画を発表した（6月2日、本部棟で）

今回、8月にドイツで現地の就労活動の調査を行う企画が採択された小出紗希さん（比文4年）は「このプログラムの魅力は自ら企画でき、費用を得られること。帰国後も学園祭で報告発表をするなど筑波大生へ刺激を与える活動をしたい」と話した。同プログラムでは昨年度、ロンドン五輪、パラリンピックの跡地を取材する企画を申請した筑波大学新聞の記者チーム4人の企画が採用され、332号でロンドン五輪、パラリンピックのレガシーを追う特集記事を、333号で「記者の声」を掲載した。（吉永真理＝生物学類2年、写真も）

---

### 理系の小中学生を指導
### 「ジュニアドクター」育成へ

筑波大学は6月、科学技術振興機構が行う小中学生の育成事業「ジュニアドクター育成塾」に応募し採択された。今後5年間、同機構から年1000万円の支援を受け、理数系の分野で秀でた小中学生を対象に、学習指導要領の範囲を超えて独自の教育プログラムを実施する。将来の科学技術の革新をリードしていく人材の育成が主な狙いで、つくば市内外の研究機関とも連携する。

「ジュニアドクター育成塾」には今年度、東京大や琉球大などの10の機関が採択され、各機関が独自の企画を始める。

筑波大は「つくばSKIPアカデミー」と題し、今年度は7月に全国から40人の小中学生を募集。まずは8月に茨城大の宇宙科学教育研究センターでの実習合宿や、夏休みの個人研究の指導などを行う。

その後、来年3月まで筑波大の教員らが生物学、地学、物理学、化学、情報学、数学の講義や実習を行う。

また9月には参加者から更に10人を選抜。筑波大教員と大学院生の2人が専属で個別に研究を指導する。この10人は来年度以降も指導を継続するという。

教育企画室の佐藤忍室長は「プログラムは主に長期休みや日曜日に実施し、学校教育と両立させた上で優秀な人材を育成したい。全国から多くの児童生徒の応募を期待したい」と話した。

募集対象は小学5、6年生および中学生。応募は7月14日までで、同月23日の筆記試験で40人を選抜する。問い合わせは筑波大社会連携課SKIP事務局まで。連絡先は電話番号・029-853-3836。（田中開＝教育学類4年）

第43回宿舎祭

# 熱気あふれる2日間

デザイン＝池田花於里（比較文化学類1年）、井手真琴（国際総合学類1年）、竹添そら（知識情報・図書館学類1年）

第43回宿舎祭（やどかり祭）が5月26、27日、平砂学生宿舎周辺で行われた。今年のテーマは「千祭（遇）」。新入生としてのやどかり祭は一生に一度であるという意味が込められている。熱気あふれる2日間を本紙記者が取材した。（木村誠、鈴木瑞穂、建内亮太＝人文学類、池田花於里、越智小夏、柏このか、豊岡恵、山本颯＝比較文化学類、佐藤有里、中村瑞歩＝日本語・日本文化学類、秋田耕平、小田和樹、横山瑞樹＝社会学類、井手真琴、エイ・レ・アウン＝国際総合学類、南圭＝教育学類、吉永真理＝生物学類、佐藤巧基＝物理学類、竹添そら＝知識情報・図書館学類）

## 前夜祭

### 火文字 晴れ呼ぶ

26日には前夜祭が行われ、野外ライブや縁日などで会場は大いににぎわった。直前まで天候が悪く、開始時間を繰り下げての開催となった。

メインステージでは、午後4時から前夜祭オープニングが行われる予定だったが、昼過ぎまでの雨の影響で太鼓の演奏ができず中止となった。午後4時55分から始まった野外ライブには、5つの軽音楽サークルから計10バンドが出演した。またミニステージでは、午後6時から午後9時まで4つの音楽系サークルが公演した。

午後9時からは、トーチトワリングと灰文字が行われた。トーチトワリングでは、実行委員の1年生6人が曲に合わせて今年の演技のテーマである「生」をイメージした「糸乱れぬ演技」を披露。最後に今年の一字「生」の火文字が浮かび上がると、会場の熱気は最高潮に達した。

トーチトワリングの責任者の松田りかさん（知識図書2年）は「テーマに合う演技を考えるのは苦労したが、演技をした1年生が感動し涙を流すなど全員がやりがいを感じたと語った。

燃え盛る「生」の火文字＝小田和樹撮影

## 本祭OP

午前11時15分にメインステージで本祭オープニングが行われた。当初はあいにくの曇り模様だったが、津軽三味線サークル「無絃塾」や応援部「WINS」による迫力のパフォーマンスのかいあってか、徐々に晴れ間が広がった。

実行委員長の岩本淳宏さん（工システム3年）はステージで「皆さんに笑顔を届けるために半年前から準備をしてきた。最高のやどかり祭にしましょう」と話した。

笑顔あふれる「WINS」のパフォーマンス＝横山瑞樹撮影

## 大学生クイズ

### 知識の幅広さ 競い合う

午後4時20分からメインステージで行われた「大学生クイズ」には4チーム12人が出場し、お互いの知識を競った。

本選は全3ラウンドからなり、総合得点で優勝を決める。各チーム3問ずつ回答する第1ラウンドでは、日本の地理やネット用語などさまざまな分野のクイズが出題され、出場者が見事正解すると会場から拍手が起こった。

第2ラウンドは、けん玉や缶積みなどミニゲームを交えたクイズで、回答者とゲームに挑戦する人に分かれた。劣勢だったチームが追い上げを見せ、会場は盛り上がった。

最終ラウンドは、各チームから一人ずつ出て回答する方式で、チームリーダーが正解すると得点が2倍になる。序盤は全チーム順調に得点を伸ばしたが、終盤の難問で差がつき、クイズ研究会のメンバーで構成されたチーム「KKR」が優勝した。同チームのメンバーは「昨年優勝した先輩方に続くことができてうれしい」と話していた。

互いの知識を競い合う参加者たち＝佐藤有里撮影

## 御輿

### 個性光る御輿に歓声

午後4時からパフォーマンス会場で、御輿パフォーマンスが行われた。今年は学群・学類、有志など全8団体が出場し、練り歩きや趣向を凝らしたパフォーマンスなどで沿道を沸かせた。

まず、参加者は御輿を担いで平砂共用棟前を出発。威勢の良い掛け声と共にパフォーマンス会場まで練り歩いた。会場に到着後は、御輿のテーマに合わせたダンスや劇を披露。個性的なパフォーマンスに会場からは歓声が絶えなかった。

全団体のパフォーマンス終了後、宿舎祭のウェブサイトを用いて投票が行われた結果、優勝は芸術専門学群に。「夏祭り」をコンセプトに、躍動感あふれる金魚の御輿と息の合ったダンスが評価された。代表の松村岳さん（芸専1年）は「御輿の図案がなかなか決まらないうえ、パフォーマンスを全てダンスで構成するなど新たな試みも行い不安な点も多かった。だが高く設定したハードルをみんなで乗り越え優勝できてよかった」と、喜びを語った。

準優勝は「プレーメンの音楽隊」をモチーフに、動物たちが森の木を使って楽器を作り演奏するなど、学類らしさあふれるパフォーマンスを披露した生物資源学類。また、御輿賞は巨大なスタジオジブリのキャラクター「トトロ」を模した御輿を作った医学群が受賞した。一方、情報学群は、パソコンの機種選定で3学類が結束を固めていく過程を描いたコミカルな寸劇を披露。パフォーマンス賞を受賞した。

上＝優勝した芸術専門学群の御輿、下＝準優勝した生物資源学類の御輿＝木村誠撮影

## ゆかたコンテスト

### 浴衣美人が観客を魅了

午後7時15分、花火の打ち上げと共に、宿舎祭のメインイベントの1つ「ゆかたコンテスト」がメインステージで開催された。今年は10の学群・学類が出場し、各団体が「ゆかコン嬢」と、その魅力を引き立てる演技を行うパフォーマーを選出。各団体の対抗戦の形を取った。パフォーマーの個性あふれる演技に会場からは歓声が上がり、宿舎祭を締めくくるのにふさわしい盛り上がりとなった。

グランプリは生命環境学群で、「ゆかコン嬢」は岩田美佳さん（地球1年）。パフォーマーらは和をテーマとしたキレのあるダンスを披露したほか、クライマックスの殺陣で会場を魅了した。また、効果音を上手く活用することで、臨場感のある演出も行っていた。岩田さんは「みんなで頑張ってきたのでうれしい。みんなで細かい部分を話合って良い演技ができた」と語った。

準グランプリの体育専門学群は、ダンス部のキレのあるダンスと、ラグビー部の力強いダンスでアクロバティックな演技を披露した。「ゆかコン嬢」の木下ひなたさん（体専1年）は、「練習時間が短かったが、みんなで協力して頑張った。緊張したが、とても楽しかった」と話した。

また、個性派賞の芸術専門学群は、ゴリラの「ゴリ子」が女の子らしさを磨いて可愛い女の子になるというストーリー展開でダンスを披露した。前半のコメディと後半のダンスでメリハリのついた演技で、「ゆかコン嬢」の佐藤彩良さん（芸専1年）は「可愛くなったゴリ子になりきり、自信を持って踊った」と話していた。

上＝生命環境学群の殺陣の様子＝越智小夏撮影、左下＝準グランプリの木下さん、右下＝個性派賞の佐藤さん＝木村誠撮影

## やどカラ

午後0時25分からメインステージで「やどカラ2017」が行われた。今年で6回目を迎える本企画に出場したのは、予選を勝ち抜いた6人。

100人を超える観客を前に出場者らはJ-POPをはじめ、アニメソングなどの楽曲も披露し、会場は大いに盛り上がった。

優勝を勝ち取ったのは丹誠也さん（工システム2年）。いつもカラオケで歌うというONE OK ROCKの「Wherever you are」を迫力のある歌声で熱唱した。丹さんは「特に練習はしていなかったので優勝できてうれしい」と笑顔で語った。

迫力ある歌声を披露した丹さん＝エイ・レ・アウン撮影

# 記者の声

石川泰行

## 期日前投票所

# 筑波大周辺の投票率低い
# 一票通し声の「発信」を

【1面参照】筑波大学生の投票率の低さが浮き彫りになりつつある。昨年7月の参院選、同11月のつくば市長・市議選を見ると、天久保、天王台など筑波大生が多く住む地域の3投票所では、投票率平均が30・83％と市全体の平均（52・35％）を20ポイント以上下回っていたほか、昨年開設された中央図書館内の期日前投票所も筑波大生の利用者が少ないという。政治は私たち若い世代の生活にもさまざまな形で結びつく。昨年、「18歳選挙」が始まったことを考えても、大学生は投票による「発信」を怠ってはいけないと思う。

つくば市選挙管理委員会によると、このうちつくば市長・市議選だけを見ると、筑波大生が多く住む地域の3投票所の数字はさらに低くなる。投票率平均は27・08％と、市全体（53・31％）を大幅に下回った。

またこれに加え懸念されるのが、昨年7月に筑波大中央図書館に設置された期日前投票所の利用状況だ。市選管によると、「外見から判断して」学生の利用者は少なかった」といい、つくば市長・市議選の場合、一日あたりの利用者平均は130人と、ほかに市内に8カ所ある期日前投票所（471人）を大幅に下回っていた。市選管によると、今後も利用者が少ない場合は、将来的に閉鎖の可能性もあるという。

2年前の夏の2カ月間、茨城県取手市の市議会議員のもとでのインターンシップに参加したことがある。勉強会参加や議会傍聴などが主な内容だったが、あるイベントで出会った60代の支持者の男性の言葉が忘れられない。

「年齢が高い世代の投票率が高いため、（高齢者向けの）福祉施設の充実などを公約の中心に掲げる議員が多い」

議員の中には当選を重要視する者もおり、彼らには得票数を増やすために確かにそういう「現実」があるのかもしれない。だがこれを逆に言えば、若者の投票率が低い限り、議員は若者向けの政策をなかなか実現しない、ということになる。そうなれば、若者は街を離れ、街は寂れ、それは結局、高齢者たちの住環境に悪影響を与える。これは悪循環以外の何物でもない。

先につくば市長・市議選での大学生の投票率が特に低いとみられる現状に言及したが、ここで考えるべきは、地方政治は私たちの生活に大きな影響があることだ。街灯設置や生活道路の整備など、身近な生活環境の改善は地方自治体が行うことが多い。

今年8月には茨城県知事選挙が行われる。繰り返すが、投票で声を「発信」しなければならない。

（社会学類3年）

# 筑波時評

## 大学スポーツ

# アメリカのシステム導入
# スポーツで大学の価値高める

**山田幸雄　教授（スポーツコーチング学）**

体育系・教授。筑波大学大学院体育研究科修了、博士（学術）。2006年より現職。筑波大学硬式庭球部部長、スポーツイノベーション開発研究センター長、体育センター長。

オハイオ州立大学では、「Athletics is the front porch of a university（スポーツは大学の玄関である）」と言われています。スポーツは、大学全体のアイデンティティーの醸成や地域社会を含む多くの関係者との交流促進によって大学の価値を高められると考えられています。大学の価値が高まれば受験者数の増加だけでなく、関係者からの支援も期待でき、学生支援や教育研究環境の充実につながります。

2016年、筑波大学は米国のスポーツブランド「アンダーアーマー」の日本総販売代理店ドームとの間に包括的連携協定を結びました。その目的の一つは、文部科学省やスポーツ庁で盛んに議論されるようになった、米国の各大学が持つ学内におけるスポーツに関する事業等を統括する組織「アスレティックデパートメント」（AD）の設置の可能性を探ることです。同年7月より行ったドーム、テンプル大学との共同研究の成果を基に、この4月、国際産学連携本部内にスポーツイノベーション開発研究センターを設立しました。

当センターの今年度の目標は、大きく3つあります。1つ目は、AD設置に関する実装実験を行うことです。ADは、大学全体で運営していくという理念のもと、学長直下の組織としたいと考えています。現在、組織、規約の作成等を行っています。

ADには、責任者として局長を置くことになります。局長には財務、経営、組織運営に優れた経験を持つ人材を外部から招こうと考えています。局長の下に、副局長を配置し、渉外担当、学内業務担当、スポーツ運営担当を担うことになります。将来的には、渉外担当はマーケティング、スポンサー獲得、資金調達などを、学内業務担当は学業サポート、コンプライアンス、医療サポートなどを、スポーツ運営担当は、チーム管理、スケジュール管理などを担当することになります。最初から全ての業務を担うのは難しいため、コンプライアンス、会計業務の統一、資金調達から始め、次第に充実させたいと考えています。

2つ目は、日本各地の大学にAD設置の必要性を伝えることです。大学スポーツの活性化には、各大学の力の結集が必要です。各大学が今後立ち上げるであろうAD設置に関する支援は、筑波大の使命だと考えています。

近い将来、米国の各大学のADの集合体である全米大学体育協会（NCAA）にならい、日本版NCAAを発足させることを目指しています。これは各大学の学長のリーダーシップの下に設置されたADを中心に運営されるため、各大学が大学スポーツをリードしていくことになるのです。

3つ目は、各大学で設置されるであろうADに関する運営スタッフ、日本版NCAAの運営を担う人材の不足に対応していくことです。現在、NCAA、テンプル大学の協力の下で人材育成プログラムを作成し、実装実験に向け動いています。

「Athletics（スポーツ）」は「Cost（費用）」ではなく「Investment（投資）」と考え、「Benefit（利益）」の増加につなげることを目指していくのです。

# 反射鏡

## 理想の働き方

政府は昨年9月に「働き方改革実現会議」を設置するなど、働き方の改革への機運が高まっている。毎月末金曜日に仕事を早く終わらせて買い物や旅行などを推奨するプレミアムフライデーが始まった一方、過労死や長時間労働などに関する報道は絶えない。筑波大学生の理想の働き方について中央図書館前などで聞いた。（建内亮太＝人文学類1年、徳永巽＝日本語・日本文化学類3年、竹添そら＝知識情報・図書館学類1年）

【地球1年・男性】

自分が最初から希望した企業に就職できれば、たとえ労働環境がほかの企業と比べて悪かったとしても自分が好きな仕事ができていると思えるので、頑張れると思う。

【人文1年・女性】

入学して間もないので、自分が将来どのように働いているか、まだ想像もつかないことも多いが、大学で学んでいる言語学を生かせる職業に就きたい。好きなことや興味のあることを仕事にできれば、ストレスを感じることもないと思う。

【国総2年・女性】

自分が結婚・出産したときに仕事と子育てを両立したい。就職活動の時にそれが可能な会社を見極めて入りたい。

【C05-1年・男性】

仕事をしながら大学院で研究をしている。前職は休日出勤や深夜残業がありつらかった。仕事と家庭を両立するのが理想。

【障科1年・女性】

自分の信念に合った仕事をしたい。さまざまな職業がある中で自分が好きと思える職業を選ぶことが大事だと思う。

【生物3年・男性】

ベンチャー企業などで自分のアイデアを生かせそうな場所で働きたい。スーツを着て毎日通勤する生活は自分には合わないと思う。

【人文2年・女性】

就く仕事がどんなものでも余暇の時間が欲しい。余暇の時間がなければ息も詰まるし、疲れてしまうと思う。

【比文2年・女性】

仕事は会社だけで行い、休日などのプライベートな時間は仕事の連絡などは一切行わず、趣味の運動や映画鑑賞を楽しみたい。

【エンス2年・女性】

よく先輩や両親などに福利厚生が行き届いた企業に就職した方が良いと聞くが、具体的にどのような点を比べればいいのかがよく分からない。

【エンス1年・男性】

自分のペースで仕事ができる企業に就職したい。長時間労働やサービス残業の強制は今後改善されるべき社会問題だと思う。

【社士3年・男性】

仕事以外の自分の時間は確保したい。8時間勤務、完全週休2日制を採用している企業へ就職をしたい。

【心理2年・男性】

将来研究の道に進みたいと考えている。自分の好きな分野について研究することができる環境であれば休みなしでも構わない。

【社学2年・女性】

大学で学んだことを生かして、地方公務員として働きたい。民間企業は、残業が多かったり、休みが取れなかったりとイメージは良くないが、公務員であれば、そういったことはしっかりしていると考えている。また、公務員の安定した生活を望んでいる。

# 筑波大学新聞読んでる？

大学が発行しているものの、一般的な広報紙とは一味違う、学生視点の記事や特集が特徴の、筑波大学新聞だが、筑波大の学生は本紙をどれだけ読んでいるのか。また、どのように思っているのか。中央図書館前などで聞いた。（池田花於里＝比較文化学類1年、吉永真理＝生物学類2年）

【比文1年・女性】

今年4月に発行された第334号には目を通した。12面の「Who's Who?」ではこういう活動を担う学生がいるのかと知ることができ、面白かった。

【国総2年・女性】

第一エリアで自分が知っている先輩が配っていたものをもらったことはあるが読んだことはない。学生の生活に関する記事なら興味が湧く。

【地球2年・女性】

気が向いたときに手に取って読んでいる。特に第333号の普段着として和服を着ている男子学生について書かれた記事など、ユーモアにあふれていると思う。

【社学3年・男性】

今年1月発行の第333号の1面に掲載されていた、運営費交付金に関する記事に興味を持った。記事を読み、大学も財政難で大変そうだと思った。

【目1年・女性】

入学式で配られた第334号を読んだ。学類長が載っている記事や、分かりやすそうな特集などを選んで読んだ。

【エンス1年・男性】

他学類のことはあまり分からないので「Who's Who?」を読むといろいろな学生を知ることができいい刺激になる。

【国総2年・女性】

読んだことはないが、毎年4月号に折り込まれている新入生名簿は記事があるので、最近の主な情報収集源はインターネットだ。

【人文2年・男性】

内容も充実しているので好きだった。ただ、学生間の知名度は低い気がする。もう少しアピールしてもいいのでは。

【心理3年・男性】

全国紙にない話題を取り上げているのが良い。今後も学生以外でも手に取りたくなるような紙面をつくって欲しい。

【人文2年・女性】

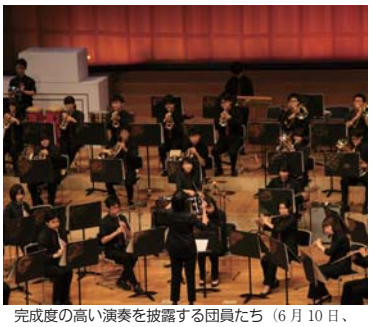
知っているがあまり読まない。置き場所が分かりづらいのでもっと目立つところに置いた方が良いと思う。

【情科2年・男性】

存在は知っているが、実際に手にとって読んだことはない。自宅にはテレビもないし新聞も取っていないので、最近の主な情報収集源はインターネットだ。

イラスト＝長手彩夏（地球学類4年）

# 吹奏楽団定期演奏会
# 「ハウルの動く城」挿入曲など演奏


完成度の高い演奏を披露する団員たち（6月10日、ノバホールで）

筑波大学吹奏楽団の第77回定期演奏会が、6月10日にノバホール（つくば市吾妻）で行われた。同演奏会は2部構成で全10曲が演奏され、訪れた約460人の観客は、団員の奏でる美しい音色に聴き入った。

フィリップ・スパーク作曲「コンサート・プレリュード」の華やかなファンファーレで演奏会は幕を開けた。軽快なリズムで曲は進むが、終盤に近づくにつれてゆっくりとしたリズムに。会場は壮大な雰囲気に包まれた。次に演奏され、ヴァーツラフ・ネリベル作曲「FESTIVO」は重厚なサウンドが印象的な曲。テンポや強弱の変化で、軽やかな部分と幻想的な部分の両方を表現した。

第2部の注目はジブリ映画「ハウルの動く城」の挿入曲「世界の約束」と「人生のメリーゴーランド」のアレンジ楽曲。ピアノも加わり多彩な音色で幻想的なジブリ映画の世界を作り上げた。

第2部の最後には、ナイジェル・ヘス作曲「ニュー・ロンドン・ピクチャーズ」を演奏。第1楽章では金管楽器の鮮明な音で明るさを、第2楽章ではゆったりとしたテンポで穏やかさを印象付けた。第3楽章は目まぐるしく変化していく街の様子を表現。変化が激しい一方で、どこか穏やかな時間の流れを感じさせるロンドンの風景を存分に表現し、観客を魅了した。

中野彬さん（比文1年）は「入団直後の演奏会で緊張したが、舞台で演奏するのは気持ちがよかった」と語った。（廣岡里穂＝人文学類3年、写真も）

# 古ボール アートで復活
## 全国5カ所で巡回展示も

ラグビーやサッカーなどの球技で使われたボールに絵を描いた作品を展示する「リボーン・アートボール展2017」が6月14日から22日まで、大学会館内の総合交流会館で行われた。

同展は筑波大学の教育戦略推進プロジェクト支援事業の一つ「芸術・体育領域の融合と共同による2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けたスポーツ芸術表現学創生プログラムの実施」の一環として行われた。

展示された作品は芸術専門学群などの筑波大生や教員が制作したほか、学外からも作品が出された。筑波大の蹴球部やラグビー部などは6つの運動部が使い古したボールを提供したほか、体育の授業で使われたテニスボールやバスケットボールなども使用された。

展示された作品の一部は今後、伊藤忠青山アートスクエア（東京都港区）や長野オリンピックミュージアム（長野市）など全国5カ所の美術館や博物館などで巡回展示される。

この展覧会を主催し、自身も作品を出品した太田圭教授（芸術系）は「今回のような使い古されたボールに絵を描く試みは珍しい。アートとスポーツの新しい関わり方を示した展覧会となった」と話した。（岡田優太、12面に関連写真）

# アニソンで交流

アニメの主題歌などを指すアニメソング（略してアニソン）を通じた交流を目的とするイベント「アニソン楽類」が5月20日にOctBass（つくば市天久保）で開催され、約50人が来場した。

中村武蔵さん（芸専3年）が企画と運営を行い、筑波大学の現代視覚文化研究会が音楽を選曲して会場に流す「DJ」として参加した。

会場では「アニソン」が大音量で流れ、参加者は曲に合わせ腕を頭上で大きく振りながら合いの手を入れるなどして盛り上がった。

DJの選曲のほか、参加者が当日会場でリクエストした曲も流された。「武装少女マキャヴェリズム」など最新のアニメから、「BLEACH」など過去のアニメの主題歌まで、人気のアニソンが会場に響いた。

DJとして参加した一ノ宮悠真さん（情科3年）は「他のDJが選ばないような曲を選び、自分の個性を出せたと思う。今回のイベントでアニソンに更に親しみを持ってもらえたらうれしい」と語った。

中村さんは「アニソンを通じ、学生が卒業しても集まるきっかけを作ろうと、このイベントを開いた。今後も開催したい」と話した。（前2裕一＝社会学類3年）

# 絶対音感

M.A

# 南米アンデスに思い馳せる

筑波大学フォルクローレサークル「南」主催の第16回コンサートが、6月10日にアルスホールで行われ、約80人が訪れた。

「フォルクローレ」は中南米の民俗音楽。南米西部のアンデス地方に伝わる音楽と、16世紀に中南米を支配したスペインの音楽が融合したものだ。葦や動物の骨から作られ、澄んだ音を出す縦笛の「ケーナ」、さまざまな長さの葦や竹の管を束ね、ビール瓶に息を吹き込むように演奏することで、独特のかすれぎみな音を奏でる「サンポーニャ」など、個性的な楽器を用いる。

コンサートは中南米の民俗衣装を着用した5人グループ「コンドル隊」による、定番曲「コンドルは飛んで行く」で幕を開けた。

ケーナの素直で澄んだ音色に、どこかはかなさを感じる。「メンバーのマイペースさが出た（メンバー）」という、ゆったりとした演奏。だがそれがかえって、大きな羽を広げ、南米アンデスの高空を優雅に飛行するというコンドルを思わせる。

伝統的な楽器にクラリネットを加えて「SANJUANITO」を演奏する会員ら（6月10日、アルスホールで）

「コンドルは飛んで行く」は1970年代、米国のシンガーソングライター、ポール・サイモンが詩をつけて歌い、世界中に知られるようになった。

サイモンの詩の中で象徴的な部分がある。「カタツムリよりはスズメになりたい／できるなら／本当にできるなら／遠くまで／できるなら旅立っていきたい／遠くまで／行き来する白鳥のように「人は土地に縛りつけられ、怨嗟（えんさ）の声を上げている／怨嗟の声を」

南米アンデスの空をひたすら自由に飛び続ける、孤高のコンドル。その対岸には、日常社会の決まりごとに縛られ身動きできない者がいる……。会場で聞いたサンポーニャやケーナの、素朴な、それでいて奥深い演奏は、生きとし生けるものの持つ宿命を想うに十分な内容を含んでいた。

6人グループの「のらりクラリ」が演奏した、テンポの良い曲調が特徴の「SANJUANITO（サンファニート）」では、ケーナなど伝統的な楽器に、ヨーロッパ楽器・クラリネットが加わった。

演奏は、ケーナと弦楽器が奏でる小気味よいメロディで始まった。同じリズムの繰り返しの中で徐々に楽器の音が重なる。だが、曲が盛り上がり出したところで主旋律がケーナからクラリネットに変わり、曲の表情が一変した。

全体的に陽気で音が高めな伝統楽器に比べ、クラリネットの音は低めで理知的だ。明るい「フォルクローレ」にスパイスを加えるようなクラリネットの音色に心を奪われた。

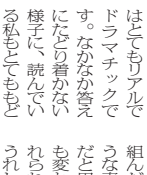
コンサートの最後は全員演奏の「アンデスの夢」。底抜けに明るい曲だ。全身でリズムを取って力強く演奏するメンバーらに釣られ、客席からも手拍子が始まる。会場は一体となり、演奏後も熱気は冷めなかった。（越智小夏＝比較文化学類2年、写真も）

## 客席からは手拍子も

# 私の一冊

## 『青の物理学』
### ピーター・ペジック 著（岩波書店）

## なぜ空は青い？自然界の謎を追え



**新田（にった） 冬夢（とむ） 助教（天文学）**

数物系・助教。筑波大学大学院数理物質科学研究科物理学専攻修了。日本学術振興会特別研究員を経て、2015年より現職。

なぜ空の色は青いのか、物理学を学んできた人にとっては、それほど苦もなく説明できることだと思います。高等学校の物理の教科書には、光の散乱についての定性的な記述から、空全体が青く見える理由や夕焼けが赤く見える理由を説明しています。さらに大学に進学を学べば、それらの理由を詳細に説明できるようになります。

しかし、その前の段階で私たちは空を青く見せる光の性質や本質、光を散乱させる大気中の分子や原子について、先人達が知り得なかった数えきれないほどのことを、当然の知識として学び理解しています。もし、その背景がなかったら、空の青い理由は説明できません。

紀元前にさかのぼって、古代ギリシャの時代から空の青さに関する議論はありましたが、イギリスの物理学者レイリーがこの問題に答えを出したのが19世紀末のことでした。私たちにとって大変身近な空が青い理由は、長らく解明されない科学のミステリーだったのです。

本書は、徐々に解明されていく青空の研究の発展を非常に鮮やかに描く科学史の書冊です。物理学や化学の教科書に名を残すたくさんの科学者が、青空の研究にも熱心に取り組み、試行錯誤を重ね、ライバルたちと議論を戦わせてきたことを知ることができます。彼らはさまざまな説を唱え、謎に挑みます。満点の解答には容易には至らないのですが、それぞれの説が少しずつ解答欄を埋めて、真実に近付いていくような研究の進展の歴史はとてもリアルでドラマチックです。なかなか答えにたどり着かない様子に、読んでいる私もとてももどかしい気持ちになりました。

青空の研究を巡る歴史はそのまま物理学の進歩の歴史です。青空の研究は、その謎が解明された後も現代物理学を支える原子論の確立に大きく寄与し、物理学の発展に貢献していきました。青空の研究や物理学に限らず、全ての科学のテーマが同様のドラマチックな科学史を抱え、これからも科学の発展を支えていくのだと思います。私も自然科学の研究に携わる身として、普遍的な探求の歴史の中に自らがいることを改めて認識するに至りました。

「青の物理学」は青い色の装丁の美しさとテーマの魅力に惹かれ、書店で思わず手に取ってしまった本です。古代の人々は青い色に不思議な魅力を感じ神秘的で畏怖を抱かせる色として捉えていました。多くの科学者たちが熱心に青空の研究に取り組んだ根底にも、きっと同じような青い色への憧れがあったのだと思います。長い時間を経ても変わらない普遍的な感覚に触れられたことも、本書を読んでうれしかったことの一つです。

# ぶらり俳句 筑波大

撮影地＝中央図書館前 秋田耕平撮影

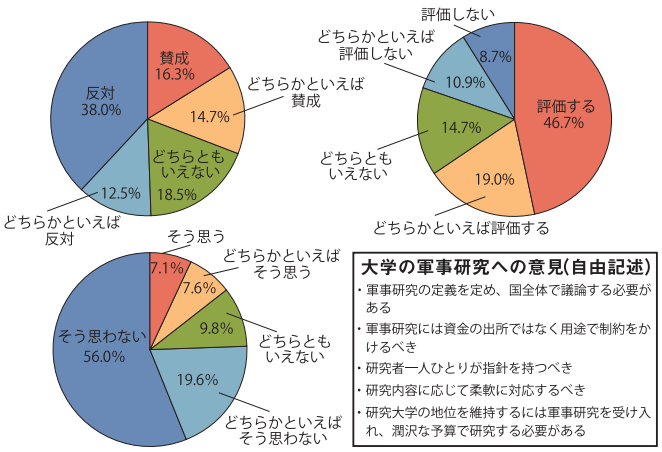
## 「泰山木（たいさんぼく）」

・泰山木咲くや一塊の影となり
・泰山木の花つたひくる水一縷
・夕星に泰山木の花潤む

中央図書館とIC・1D棟の間に、背の高い木が大ぶりの白い花をつけている。泰山木の花だ。社会経済学者である杉田菜穂の「学問の自由泰山木の花」（俳句二〇一三・八）という句は、憲法に保障された自由を、この花のどっしりとした印象に重ねたもの。図書館からの帰り道にこの花を見かけるたびに、杉田の句を思い出す。（堀下翔＝比較文化学類4年）

# 学生8割 学術会議の声明知らず

## 教員7割が「声明」評価




【教員アンケート結果】大学の研究者が防衛省から研究費を受け取ることへの賛否（左上）、日本学術会議の新声明を評価するか（右上）、自分の研究は軍事に転用可能だと思うか（左下）
四捨五入につき、必ずしも100%にはならない

## 学術会議は「軍事否定」

### 概要

【1面続き】筑波大学は3月、大学として軍事研究を否定する方向の指針作りに着手したことを明らかにした。日本学術会議が同月発表した、それまでの「軍事研究否定」の立場を継承する内容の声明を受けたものとみられるが、大学内での議論は進んでいるのだろうか。本紙は筑波大生796人と教員184人からアンケートを回収し、両者の意見を探った。（木村誠、佐々木悠里＝人文学類、越智小夏＝比較文化学類、中村瑞歩＝日本語・日本文化学類、小田和樹＝社会学類、竹添そら＝知識情報・図書館学類、添島香苗＝生物科学専攻）

大学と軍事研究の関係が問われるようになったきっかけは、防衛省が2015年に開始した「安全保障技術研究推進制度」だ。大学などを対象に、安全保障関連の研究を公募して研究費を配分する。同制度の今年度予算は110億円で、昨年度の6億円から大幅に増加。採択されると、1年間で最大3900万円が、5年間で最大20億円が支給される場合もある。

昨年度の公募では、44件の応募のうち「大学等」が52%（23件）を占めた。背景には、大学の深刻な研究費不足などがある。政府が国立大学に交付する、大学が研究費などに充てる運営費交付金は毎年約1%ずつ減少。政府から私立大への運営費補助の割合も、平成27年度に44年ぶりに運営費全体の1割を切っている。

また2月には、日本の大学などに08年から16年までの9年間で、米軍から少なくとも135件、総額8億8千万円の研究費が助成されていたことが報じられた。この資金は使い道の自由度が高い一方、結果的に軍事に利用される可能性がある。

こうした動きの中、日本の科学者の代表機関・日本学術会議（1949年創設）は昨年5月、「安全保障と学術に関する検討委員会」を設置。同会議は50年と67年に、「戦争目的の研究」を否定する声明を発表していたが、その立場を再検討した。

その結果、3月に新声明を発表し、過去の2声明を「継承する」と明記。軍事研究を否定する姿勢を改めて示した。

また、新声明では防衛省の制度にも言及。「政府による研究への介入が著しく、問題が多い」などと指摘した。

一方、筑波大の永田恭介学長は3月、大学として軍事研究に関する指針作成を開始したと明かした。同会議の新声明を受けたとみられる。

全国の大学ではこれまでに関西大、広島大などが軍事目的の研究を認めない方針を明らかにしている。

研究の現場にいる教員らは、大学の軍事研究に対してどのような意見を抱いているのか。筑波大の教員184人の回答から分析した。

### 教員結果

**【大学の研究者が防衛省から研究費を受け取ることへの賛否】**

「反対」「どちらかといえば反対」の反対派が50・5%（93人）で過半数を占めた。「賛成」「どちらかといえば賛成」の賛成派は31・0%（57人）。「軍事転用を見据えた技術研究」への賛成派23・9%（44人）を上回り、「軍事研究には反対だが防衛省からの資金受け取りには賛成」という教員の存在が浮び上がった。

**【日本学術会議の新声明を評価するか】**

日本学術会議が3月に出した新声明への評価を聞くと、「評価する」「どちらかといえば評価する」と回答した教員が65・7%（121人）で7割近くを占めた。

「評価しない」「どちらかといえば評価しない」は19・6%（36人）。「どちらともいえない」が14・7%（27人）だった。

**【自分の研究は軍事に転用可能だと思うか】**

14・7%（27人）の教員が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた。

「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」が75・6%（139人）、「どちらともいえない」は9・8%（18人）だった。

**【大学の軍事研究への意見（自由記述）】**

軍事研究の定義を定め、国全体で議論する必要がある▽研究内容に応じて柔軟に対応するべきだ▽研究大学の地位を維持するには軍事研究を受け入れて潤沢な予算で研究する必要がある……などの意見があった。

## 筑波大の指針策定

### 教員、学生 評価分かれる

筑波大は、軍事研究に関して指針策定に動き出している。筑波大の学生と教員はこの動きを評価しているのか、またどのような指針が望ましいと考えているのか。アンケートで学生と教員に同じ質問をし、結果を比較した。

**【筑波大の軍事研究に関する指針策定への評価】**

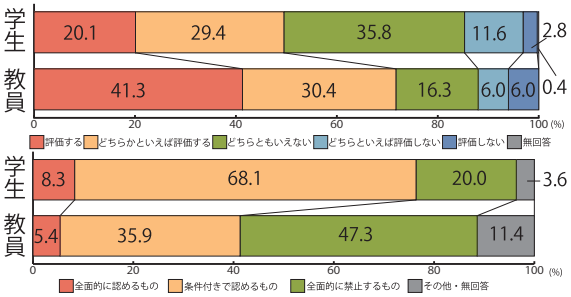
指針の内容には関わらず、指針策定への評価を尋ねたその結果、「評価する」「どちらかといえば評価する」が学生49・5%（394人）、教員71・7%（132人）で、両者で20ポイント以上の開きがあった。

「評価しない」「どちらかといえば評価しない」は、学生で14・4%（114人）、教員で12・0%（22人）。「どちらともいえない」は学生で35・8%（285人）と、教員16・3%（30人）の2倍以上を占めていた。

**【どんな指針を求めるか】**

学生では「軍事研究を条件付きで認めるもの」が最も多く、68・1%（542人）だった。次いで「軍事研究を全面的に禁止するもの」が20・0%（159人）、「軍事研究を全面的に認めるもの」8・3%（66人）だった。

一方教員では、「全面的に禁止するもの」が47・3%（87人）で最多。「条件付きで認めるもの」が35・9%（66人）、「全面的に認めるもの」5・4%（10人）と続いた。




筑波大の軍事研究に関する指針策定への評価（上）、どんな指針を求めるか（下）
四捨五入につき、必ずしも100%にはならない

## 分析

### 水野倫之NHK解説委員

今回のアンケート結果を、専門家はどう見るのか。NHKの解説委員で、科学技術分野を担当する水野倫之さんに話を聞いた。（聞き手・添島香苗）

今回のアンケートで一番驚いたのは、日本学術会議が3月に発表した新声明を8割以上の学生が知らなかったことだ。

同会議は新声明の発表に向け、昨年5月に検討委員会を設置。防衛省のほかさまざまな分野の専門家に意見を聞いたり、会員向けのシンポジウムを開いたりした。

こうした動きを含め、新声明は各メディアで大きく報道された。防衛省の資金提出制度への応募を禁止する大学も出てくるなど、大学と軍事研究についての議論はある程度行われているという印象だった。

しかし今回のアンケート結果を見ると、その議論が届いたのは大学の執行部や教職員にとどまっているのかもしれない。将来を担う若い研究者や学生には、ぜひこの問題に関心を持ってもらいたいし、彼らを議論に巻き込んでいく必要がある。そのためには、日本学術会議が積極的に役割を果たす必要があると思う。

学術会議は、全国84万人の科学者を代表する組織とうたいながら、戦後軍事研究を否定する声明を発表してから半世紀もの間、この問題について議論すら関わりを避けてきた。この間に声明が形骸化したのは否めない。

今回の新声明発表に向けてシンポジウムを開いたとは言っても東京で一度だけ。しかも会員からしか意見を聞いておらず、十分とはいえない。

なぜ新声明を出したのか、それはどんな意味を持つのか。若い研究者や学生がこの問題を考えるよう同会議が彼らの意見を吸い上げたり、定期的な議論の場を設けたりするなど、この問題に積極的に関わっていくことが求められる。

◆

**水野倫之（みずの・のりゆき）**

NHK解説委員。名古屋大学卒業後、1987年、NHKに記者として入局。原子力船むつや東海村臨界事故の取材を担当後、科学文化部、国際部の記者、国際部副部長を経て現職。NHKニュース7、NHKニュースおはよう日本、クローズアップ現代、時論公論などに出演。担当分野は科学技術・宇宙・原子力。

## 学術会議は学生巻き込む努力を

◆調査方法

5月30日から6月14日に、学生に学群の授業や課外活動団体のミーティングなどで大学と軍事研究に関するアンケートを実施。設問は10項目。文系414人、理系381人、文理無記載1人の計796人から回答を得た。学群別の内訳は、人文・文化206人、社会・国際131人、人間41人、生命環境60人、理工123人、情報130人、医45人、体育専門3人、芸術専門31人、大学院25人、無回答1人だった。

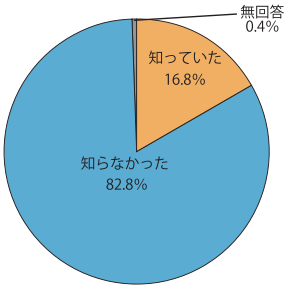
学群生の文系・理系は、所属する学群で分類した。人文・文化、社会・国際、人間、体育専門、芸術専門は文系。生命環境、理工、情報、医は理系とした。

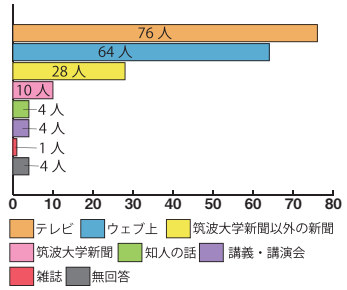
大学院の場合は専攻で分類。哲思、国地は文系。数学専攻、物分、CS、知機、生科は理系とした。

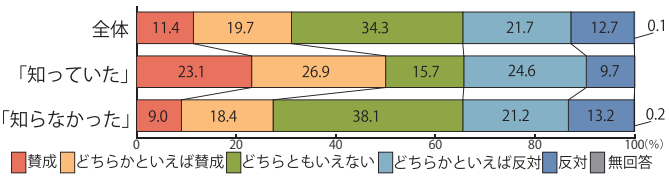
また、6月7―15日に、連絡先の把握できた各系の教員に大学と軍事研究に関するウェブアンケートのURLをメールで送信して実施。設問は10～11項目で、計184人から回答を得た。各系の内訳は、人社系38人、ビジネス系2人、数物系21人、システム情系31人、生環系32人、人間系13人、体育系8人、芸術系4人、医学医療系32人、図情メ系3人だった。

# 大学の軍事研究

## 学生 関心高いほど賛成寄りに




【学生アンケート結果】日本学術会議が3月に発表した新声明を知っているか（左上）、新声明を知っていた人のうちどこで情報を得たか（右上）、新声明を「知っていた」「知らなかった」別の軍事研究への賛否（下）四捨五入につき、必ずしも100%にはならない

防衛省が資金拠出制度を開始した15年以降、大学と軍事研究の関係は社会で議論になっており、各メディアで取り上げられる機会が増加している。学生7・96人へのアンケートで、この問題への関心の度合いと軍事研究への賛否の関係を調べた。

### 学生結果

**【問題への関心】**

日本学術会議が3月に発表したそれまでの「軍事研究否定」の立場を継承する内容の新声明を「知っていた」と回答した学生は16・8%（134人）にとどまった。「知らなかった」が82・8%（659人）で大多数を占めた。

新声明を「知っていた」学生に情報源を複数回答で尋ねると、「テレビ」が76人で最多だった。次いで「ウェブ上」64人、「筑波大学新聞以外の新聞」が28人だった。

防衛省が15年に開始し、大学などを対象に研究費を支給する「安全保障技術研究推進制度」については、「知っていた」が27・1%（216人）、「知らなかった」が72・7%（579人）だった。

また、「大学が軍事研究を行うことについて周囲の人と話したことがあるか」という問いでは、「話したことがある」学生は13・8%（110人）。「話したことはない」が86・1%（685人）だった。

**【問題への関心と軍事研究への賛否の関係】**

一方で、この問題への関心が高い学生ほど大学の軍事研究への賛成派が多くなる傾向があった。

日本学術会議の新声明を「知らなかった」学生659人のうち、大学の軍事研究に「賛成」「どちらかといえば賛成」と回答した賛成派は27・4%（180人）で、「反対」「どちらかといえば反対」の反対派34・4%（227人）を下回った。「どちらともいえない」が最も多く、38・1%（251人）だった。

これに対し、声明を「知っていた」学生134人のうち、賛成派は50・0%（67人）で、反対派の34・3%（46人）を上回った。「どちらともいえない」は15・7%（21人）だった。

防衛省の制度を「知っていた」、この問題について周囲の人と「話したことがある」と回答した学生でも同様に、賛成派が反対派を上回った。

### 視点

## 新声明の意味問い直せ

今回の調査は、大学と軍事研究を取り巻く問題への、学生の関心の低さを改めて示した。

本紙では15年7月の防衛省の資金拠出制度開始を受け、同年11月に同様のアンケートを実施した。大学の「軍事転用を見据えた技術研究」への賛否を聞いた結果、「どちらともいえない」が38・7%と最多。そのうち65・1%が、理由に「問題をよく知らない」を選んでいた。

その後、日本学術会議が新声明を発表するなど、学術界を中心にこの問題の議論が活発化。これを受け、学生の意識に変化があったかを今回の再調査で探ろうとした。だが、同会議の新声明を「知っていた」学生が2割を切るなど、学生が依然としてこの問題に関心を持たないことが明白になった。

一方で気になったのが、この問題をよく知る学生ほど大学の軍事研究に賛成する傾向があったことだ。

同会議の新声明以降、学術界は「軍事研究否定」の方向に再び動き出している。今回の調査でも、筑波大の教員の過半数が軍事研究に反対の立場だった。学生がこの問題への関心を高めるほど社会の流れから乖離していくのだとすれば、皮肉な話だ。

近年、軍事用にも民生用にも使える「デュアルユース（軍民両用）技術」が増加したり、大学の研究費不足が問題になるなど、軍事研究を肯定し得る事情があるのは事実だ。だがこの状況下で「同会議は改めて軍事研究否定」の姿勢を打ち出した。その意味を、私たち学生は今一度考えるべきだと思う。（添田喜臣）

### 訂正とおわび

335号6面のインターン特集の前文中で、「学生288人にアンケート調査」としましたが、正しくは「学生228人にアンケート調査」でした。おわびして訂正いたします。

---

鈴木健嗣教授

## 「光るビブス」交流のきっかけに
## 自閉症児に効果的な支援を

文部科学省によると自閉症スペクトラム＝9＝の子どもなど発達障がい児が通う特別支援学級の在籍者数は、この10年間で約2倍の17万5千人に増加しており、発達障がい児への支援が急務となっている。鈴木健嗣教授（シス情系）の研究チームでは、自閉症児の手首や額に小型の機器を取り付け、相手との距離や顔の向きなどを測定。他者とのコミュニケーションの取り方を数値化し、自閉症児への効果的な支援法を確立する研究を行っている。

自閉症児は幼児期から、コミュニケーションを苦手とする傾向や、言葉の発達の遅れなどの障がいを持つ。だがこれらの障がいは数値化して分析することが困難で、具体的な根拠をもった効果的な支援は難しい。

そこで鈴木教授らは、小型の機器を装着して相手との距離や顔の向きなどを数値化する「ソーシャル・イメージング」と呼ばれる技術の利用を考えた。一例としては自閉症児に相手との距離や相手に接近した時間を測る「ビブス」と呼ばれる薄いベストのような機器を着用してもらい、相手と近づいた際にそれが光る仕組みの「光るビブス」を開発した。

この上で、数人の自閉症児を対象に、子ども同士が自由に遊ぶ時間を許容し、すると、互いのビブスが発光することに興味を示したため、子ども同士が近づいて遊ぶ時間がビブスを身に付けていない状態と比べて増加することが分かった。

更にその後、ビブスを外して遊んだ場合にも、子ども同士が近づいて遊ぶ時間が増えることも判明。「光るビブス」のように他者と交流するきっかけを与えることで、自閉症児の行動に変化を与えることが可能だと分かった。

これらの技術を用いれば、客観的なデータを用い、自閉症児への効果的な支援策の考案が期待できる、というのが鈴木教授らの考えだ。

鈴木教授らは今後、筑波大学附属大塚特別支援学校でビブスをほじめとする装着型機器を使い、自閉症児への効果的な支援法確立に向けた研究を進める。同支援学校では、自閉症児のコミュニケーション能力向上を目指す施設「ミライの体育館TM」をつくり、同施設で研究を行うという。

「光るビブス」が、自閉症と向き合う子ども達の未来を明るく照らし続ける。（吉永真理＝生物学類2年）

**9 自閉症スペクトラム**＝幼少期に発症し、主に言語能力や対人関係の構築に困難をきたす発達障がいの一種。

---

国連人口基金東京事務所 所長補佐
上野 ふよう さん

## 興味のおもむくままに
## 豊かな経験で世界広げて

今年の5月の連休につくばに行きました。新緑の並木道や、点在する公園を眺めながら、奇麗な街だなぁとつくづく思いました。そして、学生時代の4年間を、大学と宿舎と、それを取り巻くこの「研究学園都市」というある種特異な場所で暮らしていたことを懐かしく思い出しました。大学では、籍を置いていた比較文化学類の枠を超え、生物学類や芸術専門学群の講義を受けたり、4年生になっても体育の授業に出ていたこと、テニスや雑誌編集サークルに入り、取材して記事を書き、広告の営業をしてクライアントに合わせてキャッチコピーまで書いたり、ケーブルテレビの情報番組の司会のアルバイトをしたこと。都市と地方の狭間に生まれた空間で、一味変わった学生生活を過ごしたなぁ、と……。今思えば、興味のおもむくままに、目の前に現れるものに飛びついていましたが、不思議と居心地の良い守られた空間で伸び伸びと活動していた気がします。社会人になってからも、同じ大学卒業という先輩や後輩にお会いする度に、「あの土地で学生時代を過ごした」という共有体験でつながり、不思議と連帯感を感じます。

比文で現代思想を専攻し、卒業後は出版社に勤務。その後幾つかの企業で広報業務に携わった後、スイスの大学でフランス語と言語学を学び、大学院に進学。日本帰国後は、国連機関で国際協力分野に従事という、かなり脈絡の無いキャリアパスをたどってきた私は、在学中はもちろん、今の自分の姿など想像すらしていませんでした。常磐線に乗って上京してばと東京の地理的な距離を超える可能性があるのではないでしょうか。

自分の職業人生を振り返り、確固たる専門性を持ち首尾一貫したキャリアを追求することの重要性を感じることも多々あります。学生の皆さんには、せっかくアカデミックな場にいるのですから、一生に一度は自分が没頭できるものを徹底的の基礎となっていますし、精神的な自信となって自分を支えています。

そして、どんな経験でも無駄なものは何も無いとともに、こっそり自分にも言い聞かせています（笑）。好奇心旺盛な若い時代に、さまざまなことに触れて刺激を受け、自分の世界を広げることはその後の人生の大きな糧となりますから。

例えれば、芯の太い幹に緑濃い枝葉が繁る、というイメージでしょうか。5月に久しぶりに見たつくばの大通りの並木も、私が学生の頃から20年以上経ち、随分逞しくなっていました。

皆さんも自分の人生という樹に、今できる限りたっぷりの栄養を与えて、その後美しい花を咲かせ、おいしい果実を実らせ、できるだけ豊かに成長させてほしいと思います。（平成元年度比較文化学類卒）

# 男子 無敗で2連覇

## 関東学生春季リーグ

### ハンド

【国士舘大学多摩キャンパス体育館（東京都多摩市）で豊岡恵＝比較文化学類1年、写真も】関東の10大学で争う関東学生春季1部リーグが、4月15日から6月4日まで行われた。筑波大は7勝2分でリーグ戦2連覇を果たした。小柳諒祐（体専4年）が最優秀選手に選ばれた。

5月20日のリーグ最終戦では、昨リーグ準優勝の明治大と対戦。筑波大は持ち前のスタミナと、明治大のプレーに合わせた柔軟なディフェンスで相手にリードを許さず、31－22で勝利した。

前半、筑波大は相手の隙のないディフェンスに苦戦。得点を狙い、選手は何度も果敢にゴールを狙ったが、明治大のディフェンスを崩しきれなかった。筑波大は明治大の堅い守りの合間を縫った速攻で点を稼ぐも、相手を引き離せず、両チームが主導権を握れぬまま、前半は13－11で終了した。

後半開始直後もしばらく点差は広がらなかったが、10分、エース徳田新之助（同4年）の得点を皮切りに筑波大が点を伸ばし始め、試合は筑波大のペースへ。後半に入ってもスタミナが落ちなかった筑波大は、徐々に堅いディフェンスを突破しての得点やパスカットなどの好プレーを連発。相手のディフェンスを振り切った牧野イサム（同3年）のシュートなどで得点を重ね、キーパー森脇龍（同3年）のセーブも安定。最終的に、9点差をつけ31－22で快勝した。

ネメシュ・ローランドコーチ（体育系・助教）は「ディフェンスが安定したことで、筑波大の強みである失点のなさを生かすことができた」と語った。牧野は「前半は緊張したが、後半からは余裕を持ってプレー出来た。徳田さんが作った流れに上手く乗る」とで点を重ねられた」と振り返った。

明治大のディフェンスを振り切ろうとする牧野（5月20日、明治大戦で）

# 準優勝果たす

## 首都大学春季1部リーグ

### 野球

【バッティングパレス相石スタジアムひらつか（神奈川県平塚市）で前名裕一＝社会学類3年、写真も】4月から行われていた首都大学春季1部リーグが5月28日に閉幕した。筑波大は8勝5敗で昨季リーグから3つ順位を上げ、準優勝を果たした。また、種子島大輝（体専3年）、細川諒太郎（同4年）がリーグの最優秀選手「ベストナイン」に選ばれた。

5月21日に行われた明星大戦では5回の相手野手の送球ミスを機に得点し、2－0で勝利した。

打線は初回から明星大投手村秀一（2年）の上から投げ下ろす角度のある直球と変化球に苦しめられ、得点の機会を得られなかった。だが、5回表、先頭の髙瀬将太郎（同2年）が右前安打を放つと、続く重貴裕（同3年）のバントで走者1、2塁とチャンスをつくった。そして松谷が放った打球を相手の遊撃手が悪送球。その間に走者が還り2点を先制し、決勝点となった。

先発の中貴慶大（同2年）は何度も走者を2、3塁に置きピンチを招くも、切れのある変化球が中心の打たせて取る投球でピンチをしのぎ、明星大打線を無得点に抑えた。

8回からは大場遼太郎（同4年）が持ち味の力強い直球を武器に、無得点で試合を締めた。

川村卓監督（体育系・准教授）は試合後「春季リーグを通してずっと不振が続いていたため、声を掛け合う、塁まで全力で走るなど

打たせて取る粘りの投球を見せる中貞（5月21日、明星大戦で）

# ユニバ組好調維持

## ジャパンオープン

### 水泳

【東京辰巳国際水泳場（東京都江東区）で明石尚之＝体育専門学群2年、12面に関連写真】ジャパンオープンが5月19－21日に行われた。筑波大は男子200㍍バタフライで渡会舞（体専4年）が1分56秒82で5位、女子50㍍自由形で住岡叶夢（同1年）が25秒62で6位に入賞した。また、ユニバシアードの日本代表に選出された平山友貴奈（同4年）が女子50㍍バタフライで26秒88、大久保琳太郎（同3年）が男子200㍍泳ぎで2分10秒94、岡野圭穂（同3年）が女子50㍍自由形で25秒61を記録しそれぞれ5位に入賞し、安定した泳ぎを見せた。

仙石泰雄監督（体育系・助教）は「レベルは昨年より確実に上がってきている。表彰台まであと少しのところだ」と大会を振り返った。

---

## 天皇杯全日本選手権

# ベガルタ仙台撃破

### サッカー

【ユアテックスタジアム仙台（仙台市泉区）で小宮山瑛生＝社会学類3年、写真も。1面に関連記事】筑波大蹴球部の快進撃が続いている。6月21日に行われた天皇杯全日本選手権ではJ1のベガルタ仙台を3－2で下す「ジャイアントキリング」を成し遂げた。また、関東大学リーグの前期最終戦が25日に行われ、2位との勝ち点差を4として1位での折り返しを決めた。エースの中野誠也（体専4年）は今リーグ前期で9得点を挙げ、得点ランキングでトップに立っている。

6月21日の仙台戦、序盤は相手の激しい攻撃が続き、筑波大は体を張ったプレーで守り続ける展開になった。しかし、前半6分に三笘薫（同2年）が自陣深くでボールを受けると下川柊斗（同4年）らの相手を引き付ける動きにも助けられ、ゴール前まで一人で持ち込むと自らシュート。キーパーの手を弾きネットを揺らした。

先制をしたものの、その後も仙台による激しい攻撃が続いた。31分、さらには後半5分に筑波大出身の中野嘉大（平成26年度体育専門学群卒）にゴールを決められ、一転、追いかける立場にされてしまった。

その後、再逆転を目指し攻勢を強めたが、プロの守備は固く崩し切れない。その悪い流れを変えたのが中野誠だった。20分、コーナーキックを小笠原佳祐（同3年）が頭で折り返し、中野誠がヘディングゴールを決めた。「小笠原が競り勝つと信じていた。ヘディングゴールは自分の得意な形のゴールではなかったが、チームに勢いをつけられたと思う」（中野誠）。

追いついた筑波大は更に積極的なプレーを見せた。28分、西澤健太（同3年）が前線からプレスをかけ、相手のパスをカット、カウンターを仕掛けた。勝負どころの場面、ゴール前でパスを受けた三笘が魅せた。相手キーパーが右に重心を傾けたのを見逃さなかった。ここ一番の局面で、冷静にゴール左隅に流し込んだ。「力まず、コントロールすることだけ考えて打った」（三笘）。この点差を守り切り、J1撃破の「ジャイキリ」を成し遂げた。

小井土正亮監督（体育系・助教）は「プロが相手だから、という気負いはなかった。拮抗した試合の中で3点目のようにチャンスを生かせたことが勝因だった」と振り返った。

◆

7月12日のアビスパ福岡戦はケーズデンキスタジアム水戸（水戸市）で行われる。蹴球部はバスツアーを開催し、集中応援を呼び掛けている。小井土監督は「一人でも多くの人が応援に駆けつけてくれるとうれしい」と話した。

試合終了間際、更なる追加点を狙い、果敢にドリブル突破をはかる中野誠（6月21日、ベガルタ仙台戦で）

# 三笘 2得点の活躍

この日2得点を決めた三笘（6月21日、ベガルタ仙台戦で）

# 女子5人制 準優勝

## 全日本学生優勝大会

### 柔道

【日本武道館（東京都千代田区）で加藤未悠＝社会学類3年、写真も】体重無差別の団体戦で大学日本一を争う全日本学生優勝大会が6月24、25日に行われ、筑波大男子が3位、女子5人制が準優勝に輝いた。女子は前大会ベスト8から大きく躍進した結果となった。また、優秀選手に、佐々木健志（体専3年）、津金恵（同4年）が選出された。

■男子

25日の準々決勝の近畿大戦では、先鋒の田中英二朗（同2年）が53秒で大外刈りを決め先取。その後五将で一本を取られ追いつかれるものの、三将の佐々木が背負い投げで一本を取り、再びリード。続く副将戦で大橋賢人（同4年）が巴投げの技ありを決め、3－1で勝ち上がった。

準決勝の相手は、前大会優勝の東海大。先鋒、次鋒戦で相手にリードを許すが、続く五将の田嶋剛希（同2年）が小外刈りで一本を奪い、巻き返しを狙った。しかし、その後は筑波大の選手は全て一本や技ありを取られ、1－6で筑波大が敗退した。

■女子

準々決勝まで順調に勝ち進んだ女子5人制は、24日の準決勝で前大会準優勝の環太平洋大と対戦。先鋒、次鋒、中堅戦では、互いに技を決めきれず引き分けた。副将の津金が内股で一本を先取。大将戦も引き分けに持ち込み、1－0で決勝に進出した。

決勝では、同大会3連覇中の山梨学院大と対戦。先鋒の柴田理帆（同3年）の相手は普段同階級の出口クリスタ。積極的な攻めの姿勢を見せるも一本には至らず、3分43秒で崩袈裟固を決められ、一本負けを喫した。その後逆転を狙うも強豪相手に攻めきれず、0－1で準優勝となった。

小野卓志監督（体育系・特任助教）は「男子は体格が小さい中で、スピードを生かした攻め方ができた。東海大戦でも、格上相手に積極的に攻撃する姿勢を見せてくれた。女子は一人ひとりが自分の力を出し切り、チームとしてまとまったことが勝ちにつながった」と選手の健闘をたたえた。また、「今後は10月の全日本学生体重別選手権で、個人、団体ともに優勝を狙いたい」と語った。

決勝戦で積極的に攻める柴田（左）（6月24日、山梨学院大戦で）

## 全関東学生選手権

# 男子 27年ぶりの決勝

弓道

【日本武道館（東京都千代田区）で横山瑞樹＝社会学類1年、秋田耕平＝同2年】関東の93大学が争う全関東学生選手権が6月11―18日に行われ、筑波大は男子団体で準優勝、女子団体で4位となった。男子団体の決勝戦進出は27年ぶり2回目、女子の準決勝進出は2年ぶり13回目。また個人戦では、男子の上田篤（体専1年）が6位に入賞した。

■男子

団体予選を順調に突破しシード権を獲得した男子は、決勝トーナメント2回戦は24射中22中、3回戦は20中と安定した成績を残した。準決勝では近年上位入賞を続けている法政大を相手に、3人が「皆中」するなど安定感を見せ、19中で27年振りの決勝進出を果たした。

しかし、決勝の日本大戦ではそれまでの勢いを失い、13中に終わった。主将の阿部哲哉（同3年）は「会場の空気にのまれてしまった」。準優勝は良い結果だが、素直に喜べない」と悔しさをにじませた。

松尾牧則監督（体育系・准教授）は、昨年よりもチームの状態は良いが、まだ進歩の途中だ。トップ校の仲間入りをするには経験が不足している」と語り、「8月の全日本学生選手権（インカレ）までには緊張してしまうところなど弱点を修正していきたい」と意欲を見せた。

個人戦では上田が予選を通過し、決勝戦では一射ごとに的中しなかった選手が脱落していく「射詰」で6位につけた。

■女子

男子と同様にシード権を獲得した女子は、2回戦で東京海洋大、3回戦で昨年度優勝の法政大を安定した試合運びで破り、勝ち進んだ。だがその後の戦いは接戦となり、準決勝では日本大に、3位決定戦では桜美林大にそれぞれ僅差で敗れ、4位に終わった。

主将の吉田知世（障害3年）は「結果は少々残念だったが、次につながる試合だった。状態は上向いているので、インカレでは優勝を目指したい」と語った。

準決勝で「皆中」を決めた阿部（6月18日、法政大戦で）＝横山瑞樹撮影

# 女子は4位入賞

## 精神面の弱さ露呈

観戦記

試合が始まった途端、日本武道館は熱気と緊張感に包まれた。27年ぶりの決勝戦進出となった筑波大男子は大一番での精神面の弱さから、最後に決めきれず結果を残せなかった。

「決勝戦という舞台の雰囲気にのまれた」。主将の阿部哲哉（体育3年）は厳しい表情で振り返る。男子はここ3年、予選敗退が続いていた。久々の全関東選手権の決勝戦という大舞台。相手は何度も全国制覇をしている強豪の日本大。準決勝まで安定した試合運びを見せた筑波大だが、決勝戦では大前（第1手）、第2手、第3手と的を外し、流れを変えてしまった。阿部が「自分たちで負けの流れを作ってしまった」と語るように、その後の試技も伸び悩んだ。結果、24射中13中と日本大の22中に大きく差を開けられての敗戦。松尾牧則監督（体育系・准教授）も「最後に踏ん張れない弱さが出た」と話した。

似た展開は、5月の関東春季選手権でもあった。1射目で大前（第1手）、第2手が続けて的を外し、流れをつかめず敗北。大一番で最大限の力を発揮することが、今後の一番の課題だ。

ただ例年よりも実力の伸びは著しい。松尾監督は「男子は普段、24射中20中は決めている。準決勝までの試合は危なげなく進んでおり、あと一歩のところ」と期待を寄せる。

8月の全日本学生選手権（インカレ）まで残り1カ月余り。筑波大弓道の復活は、もうそこまで来ている。（秋田耕平）

# 女子 18年ぶりの優勝

## 男子 中央大に敗れ準V

高さを生かしたスパイクで得点を狙う丸尾（6月25日、青山学院大戦で）

バレー

東日本インカレ

【墨田区総合体育館（東京都墨田区）で越智小夏＝比較文化学類2年＝写真も】東日本インカレが6月22―25日に行われ、筑波大女子が18年ぶりの優勝、男子が準優勝を果たした。優秀選手賞、ベストスコアラー賞に井上愛里沙（体専4年）が選ばれるなど、4選手で5つの個人賞を受賞した。

■女子

2回戦から出場した女子は、準決勝で東海大と対戦。第2セットを落とすも勝利を収め、25日の決勝戦へ駒を進めた。

決勝戦の相手は、準決勝まで1セットも落としていない青山学院大。筑波大はブロックなど粘り強いディフェンスで相手のミスを誘うと、徐々に点差を広げ25―16で第1セットを先取。

第2セットも、井上や丸尾通香（同3年）らの強烈なスパイクが決まり、25―14で相手を圧倒した。

第3セットは、中盤からエース武智洸史の強烈なサーブで連続失点を許すなど、25―14でこのセットを落とした。

第2・第3セットでは、小澤宙輝（同2年）らのスパイクが要所で決まるも、中央大の鋭い攻撃に対応しきれず、25―23、25―22でセットを落とし敗北した。

秋山央監督（体育系・助教）は「サーブが決まらずあれがつかめなかったのが敗因」と話した。主将の中根聡太（同4年）は「強いサーブやスパイクにも対応できる安定したチームにする必要がある。ブロックとレシーブの連携など、チームとしての守備力や攻撃力を高めたい」と今後の課題を語った。

粘り強い守備見せる

中西康己監督（体育系・准教授）は「選手全員が力を発揮したから優勝できた。特に決勝は、3年生が守備でチームを引っ張ってくれた」と話した。

主将の井上は「1、2年生も頑張ってくれて、相手の攻撃にも対応できた。3セット目のような接戦になった時に、確実に決められる攻撃力を研究していきたい」と話した。

■男子

男子は準決勝まで1セットも失わずに25日の決勝に進出し、中央大と対戦。第1セットは、中央大の後のない青山学院大が追い上げ接戦となるも、筑波大は逃げ切って25―23で勝利を収めた。

# 目指すは五輪とカヌー普及

顔

カナディアンカヌーのスプリント競技で、一昨年、昨年と世界ジュニア選手権の1000㍍で決勝にコマを進めた。日本オリンピック委員会の強化指定選手にも選ばれており、しなやかで無駄のないフォームが持ち味の期待の新星だ。競技は、オールの下方に水かきが付いた「パドル」を漕いでタイムを競い、200、500、1000㍍などの種目があるが、その中でも比較的距離の長い500、1000㍍が得意だ。

出身の千葉県香取市は、カヌーが盛んな場所。だが、幼少期は友人から誘われてバスケットボールをしていた。しかし、小5当時の身長は1―30・6㌢と平均の138・78㌢（平成21年度）より低い。体格差から周りの選手とのチームプレーがうまいかず、小5で辞めてしまった。

当時を振り返り「個人競技をしたいと思った」。その時、この地域でしかできないことを、と考えたらカヌーがあった」と話す。

近隣の河川ではカヌークラブが練習していた。小6でそのクラブに所属。仲間と4㌔先まで川をさかのぼるなどゲーム感覚で楽しんでいた。

中学生になり本格的に競技に取り組むようになると、高3の先輩4人中3人が日本代表という環境で練習することに。日本代表のクラブの先輩は、ただただ憧れの存在だった。だが大会出場の機会が増え、「勝ちたい」という気持ちが膨らんでいった。日本代表のクラブの先輩は「憧れ」から「目標」へと変わった。

JOCカヌー強化指定選手

## 八角周平（ほすみ）（体専1年）

才能はすでに開花。中1から全国大会に出場し、中2の全国大会では学年別のレースで後続に50㍍もの大差をつけて優勝した。また中3で出場した国体では6位入賞を果たした。「（国体では）高校生もいるレースで入賞したことで、やれる気がした」。更に競技に熱が入った。

高一の日本選手権ではいきなり1000㍍でトップと100分の3秒差で2位に入った。そして高2だった2015年、日本代表に選ばれ、同年の世界選手権（ポルトガル）に出場。1000㍍で12位と好成績を残した。「いけるのではないか」。本気で世界のトップを狙い始めた。

だが同時に苦しんだのが「同世代で敵なし」ゆえの「勝って当然」の重圧だった。それに耐えきれず、ベストを出せない大会が続いた。特に弱さが現れたのが高2のインターハイ。200㍍の直前に精神的に追い込まれ、結局4位に終わった。

現在、社会人が出場する種目では社会人との実力差もあり重圧は少ないという。だが将来を考えると、勝ちにこだわればこだわるほど重圧に負ける弱さは大きな課題だ。

筑波大学への進学は、「競技人口が少ないカヌーは、日本代表クラスでも指導者不足や、指導法が確立しないなど問題点が多い。それを少しでも改善したい」という思いからだった。運動生理学や運動力学などに基づいたカヌー指導法を確立したいと考え、スポーツ科学分野に強い筑波大を選んだ。

高い志の先にあるのは、カヌーの普及。東京五輪へ向け、そしてカヌーを広めるため、今日もパドルを漕ぐ。（秋田耕平＝社会学類2年、写真は本人提供）

瀬立 W杯2位

カヌー

パラカヌーのワールドカップ第2戦が5月25日、ハンガリー・セゲドで行われ、女子カヤックシングル200㍍（運動機能障害）で瀬立モニカ（体専2年）が1分5秒290で2位に入った。

瀬立はスタート直後の加速に成功。リオパラリンピック銀メダリストのイダイナ・ミュラー（ドイツ）を相手に一時は船半分のリードを奪った。だが後半になると徐々に失速。1位のミュラーから約4秒遅れて2位でゴールした。

瀬立は「昨年の冬から強化してきた序盤の加速はうまくいったが、体力が続かず後半の失速につながった」と語った。ただ「ミュラーとは徐々にタイムが縮まってきている。8月の世界選手権では更に上を目指したい」と意欲を見せた。

瀬立は今後、8月にチェコで行われる世界選手権に出場する。（秋田耕平）

### 訂正とおわび

335号9面の柔道全日本選抜体重別選手権の記事で、「ささえこみつりあし」と記述しましたが、正しくは「ささえつりこみあし」でした。おわびして訂正いたします。

# 粗大ゴミ置き場に防犯カメラ

## 学外者による不法投棄防止

学外からの不法投棄の防止のため、筑波大学は平砂・一の矢学生宿舎の粗大ゴミ置き場周辺に、防犯カメラを計4台設置する。不法投棄と景観の悪化への対策として筑波大は3月、宿舎付近に施錠可能な粗大ゴミ置き場を設置。宿舎利用者に限った利用を目指したが、施錠するとかえって周辺にゴミが放置されるとの懸念から、最終的には施錠しなかったという。粗大ゴミ置き場には現在も、学生宿舎から出るはずのない洗濯機が捨てられるなど、学外からの不法投棄が続いていると見られる。

（越智小夏）

防犯カメラの設置は業者に委託し、7月中に設置の予定。カメラの存在は張り紙などで周知する。設置にかかる費用は未定。画素数や記録容量などによって値段は大きく変わるが、一般的には1台10数万円だという。

両宿舎付近にはこれまで、10年以上前から家具や家電などの不法投棄が続いていた。ゴミには業務用の大型冷蔵庫なども含まれており、宿舎利用者以外の部外者が不法投棄をしている可能性が指摘されていた。景観の悪さも問題視されていた。

これを受け学生生活課は3月、施錠可能な粗大ゴミ置き場を設置。カギを学生宿舎管理事務所で管理することで、学外者の不法投棄の防止に乗り出していた。だが同管理事務所は、カギがかかっていると粗大ゴミ置き場以外の場所にゴミが放置され、景観が悪くなると懸念し、カギはかけていなかった。

同課は「防犯カメラの存在を周知し、学外者による不法投棄が減ることを期待したい」と話している。同課によると、3月の粗大ゴミ置き場設置後、半月で処理されたゴミの量は21㌧と例年並みで、量に変化はなかったという。この半月でかかった処分費用は約120万円だった。

◆

都市計画や犯罪予防が専門の雨宮護准教授（システム情系）に、防犯カメラの効果や学外からの不法投棄対策の防止について話を聞いた。

**――カメラの設置で不法投棄は減少しますか。**

周囲の環境によって効果は変わるが、ある程度は減らせるのではないか。そのためには、カメラの存在を知らしめる必要があるだろう。

## 宿舎を問う

**――今年3月、平砂・一の矢宿舎に設置された粗大ごみ置き場は施錠可能で、施錠すれば不法投棄がなくなる、という発想でした。しかし施錠すると別の場所に不法投棄されるという懸念から、施錠しなかったといます。**

（他の場所への不法投棄の）可能性は確かにある。だが、犯罪ができないと分かれば諦める人が一定数いるという研究結果もあり、施錠した場合、不法投棄は減るのではないか。一度、実験的に施錠してはどうだろうか。

**――不法投棄の防止に向け、この他にどんな対策が考えられますか。**

絶対的な解決策はない。施錠や、防犯カメラ設置などを実験的に行い、効果を検証したうえで、有効な対策を行うのが良い。（これらの分野で）筑波大には専門家が多いので、協力を仰いではどうか。

粗大ゴミ置き場の様子（6月30日、平砂学生宿舎で）＝池田花於里撮影

# ネットの詐欺的被害　つくば市で問題に

## 昨年の相談件数1479件

詐欺的被害のイメージ（7月1日、筑波大学新聞編集室で）＝徳永翼撮影

「ネット上のサービスで不当請求された」などの被害を訴えて、つくば市の一般市民や、大学生などがつくば市消費生活センター（つくば市吾妻）に相談するケースが目立っている。同センターによると昨年の相談件数は1479件。うち学生は86件で、一昨年に比べ11件増だった。利用の覚えがなかったり、無料をうたったサービスからの請求なども含まれ、同センターでは「おかしいと感じれば、すぐに相談してほしい」と呼びかけている。「14万円を支払わされた」と訴える筑波大学生に取材した。

（徳永翼、橋野朝奈＝日本語・日本文化学類3年）

### 学生の相談増加

被害を訴えるのは筑波大の男子学生Aさん。昨年10月頃、ネット掲示板で知り合い好意を持った女性から、連絡先を交換する専用サイトに誘導された。

サイトは有料でメッセージのやり取りをするもので、登録料は1000円。サイトには、メッセージで連絡先を送るには1回目1万円、2回目3万円、3回目10万円を先払いする義務があると書かれている。

Aさんは掲示板上で女性から「1回目で連絡先を送信してくれれば、後で会った際にその後の料金を支払う」と促され、1万円を先払いしてLINEの個人番号を送った。だが「規約違反のため、この情報は送れない」と表示された。

サイトに問い合わせると、「電話番号などであれば送れる」と言われ、Aさんは「2回目」だったため、さらに3万円を先払いして電話番号を送った。だが次は「形式が規約と異なり、送れない」と表示された。メールで問い合わせると「ハイフンを入れて送る必要がある」と言われた。

「金額が高すぎる上、利用方法に疑問を抱き、騙されている可能性を考えた」が、すでに4万円以上を支払っていたため女性との「交友関係」を諦めきれず、さらに10万円を支払い、電話番号にハイフンを加えて3回目の送信をした。すると「形式が規約と異なり、送れない」と出た。問い合わせると「ハイフンのほかに、○を付ける必要がある」と言われた。

こうした詳しい条件は利用規約には書かれておらず、この時点でAさんは「騙されている」と確信。サイトにメールで返金を要求したが、応じてくれなかった。また女性と知り合った掲示板を確認すると、その女性とは既に連絡が取れなくなっていたという。

被害に遭った後、同センターに相談すると、「不当請求」だと指摘された。センターを通してサイトと交渉を重ね、7万円の返金を受けることができた。

「友人に次々と恋人ができる中で寂しさと焦りを感じていた。自分はこんな手口に引っかからないと思っており、ショックは大きかった」（Aさん）。被害にあった精神的苦痛などから、現在は医療施設でカウンセリングを受けている。

センター相談員の岡田美枝子さんによると、学生からの相談には、セミナーの参加権を高額で購入させ実際にはセミナーを行わないなどのケースも多い。

岡田さんは「おかしいと感じれば、すぐ相談してほしい」とする一方、Aさんのようなケースでも、契約を結んでそのサービスを利用してしまえば、簡単には契約を取り消せない、と指摘。「契約についての知識や対処方法などを出来る限り知ってほしい」と話した。

# 留学生の目

## 日本人の優しさに触れて

ウガンダ　ナカッジ アネット

2016年8月31日、私はウガンダから日本にやって来ました。筑波大学で生物学を学ぶためです。来日前、私は日本に行くことを心待ちにしていました。日本での生活を考える度、期待に胸を膨らませていました。

私は、日本は世界一の技術大国だという印象を抱いていました。子どもの頃から、ウガンダを走る自動車は全て日本製だと聞かされてきたためです。実際、日本で訪れたほとんど全ての場所で、ウガンダでよく耳にした日本の技術力の高さを目の当たりにしました。

日本に来て、最初に気づいたことは日本が本当に安全な国だということです。たとえ真夜中であっても、何の恐れもなくどこにでも行くことができます。

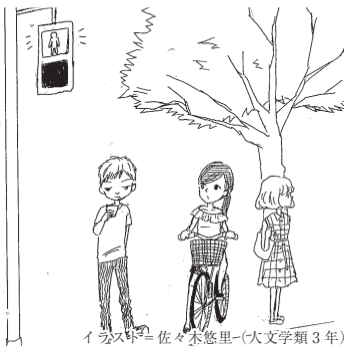
カルチャーショックを受けたこともあります。例えば、道路を渡るときに信号機に従うことです。ウガンダは発展途上国で、信号が未整備の地域は多く、私が生まれた地域には信号は整備されていませんでした。そのため、道路を渡る前に信号を見て判断しなければならないということを知らず、信号を前にするとどうしていいか分からず戸惑いました。日光が反射して信号の色が分からず混乱することもありました。

私はできるだけ多くの日本の人々と出会いたいと考えていました。しかし、当初は日本語をすらすらと話せるわけでもなく、日本文化についてもよく知らなかったため、もしかすると彼らに何か心無いことを言われるのではないか、差別されるのではないかと心配になることもありました。

しかし、実際にはそんな心配をする必要は全くありませんでした。日本の人々は親切で人懐こく、思いやりがあります。おかげで日本のどこに行っても気楽に過ごせるし、彼らと楽しく交流しながら日本語や日本文化を学ぶことができました。

私にとって日本はとても居心地の良い国です。日本の人々の思いやりのおかげで、気兼ねなく過ごすことができます。日本の料理はおいしく健康的ですっかり気に入りましたし、ウガンダの料理を恋しく思うこともありません。あらゆる角度から見て、日本はこれまで私が滞在したことのある国の中で最高の国です。

（生物学類1年、原文は英語、日本語訳・益本健太＝人文学類2年）



イラスト＝佐々木悠里-（大文学類3年）

# E.S.S.2連覇

## 英語で社会制度を討論

日本最大の英語討論大会「Japan National Debate Tournament」の本選が、5月7日に龍谷大学（京都市伏見区）で開催され、筑波大学E.S.S.の福田航輝さん（社工3年）と池雲超さん（工システム3年）のペアが優勝した。昨年は山川遼さん（国総4年）と飯田祐大さん（社学4年）のペアが優勝しており、E.S.S.が連覇を果たした。

同大会の本選はトーナメント形式で行われた。1つのテーマについて肯定側と否定側に分かれ意見を戦わせ、より説得力のある意見を述べたペアが勝利する。

今回のテーマは最低限の生活を保障するために、全国民に一律同額の現金を支給する社会保障制度「ベーシックインカム」。福田さんらのペアは順調に勝ち上がり、決勝では否定側に立った。討論では、ベーシックインカムが個人単位で支給される点に注目。一般的には人数が多い世帯ほど、一人当たりに必要な生活費が少なくなるため、必要以上の支給が行われるという問題点を指摘。世帯ごとに支給を行う代替案を提示し、討論の主導権を握り、優勝を果たした。福田さんは「昨年度の大会で優勝した先輩たちに続けて、ともうれしい」と話した。

（佐藤巧基＝物理学類2年）

## 「脱原発の哲学」著者と議論

国の原子力政策を根源から問い直す著書「脱原発の哲学」（人文書院）を昨年2月に出版した佐藤嘉幸准教授（人社系）、田口卓臣・宇都宮大学准教授を招き、同書の内容などについて議論する「会議会」が、5月18日に人文社会系棟で行われ、学生や教員ら約30人が参加した。

同書は、哲学者の思想や公害の歴史などをもとに、原子力発電を巡る問題点を指摘し、脱原発を主張。会議会では、「3・11受入全国協議会」代表の早尾貴紀・東京経済大学准教授や五十嵐泰正准教授（人社系）、本間信和さん（教育専攻・1年）が、コメンテーターとして参加。「原発事故による健康被害と、原子力政策は分けて考えるべきだ」など、同書の問題点や疑問点を提示し、反対や容認といった原発に対する立場の対立を越えた真摯な議論が行われた。

司会進行役の木村周平助教（人社系）は「原発に関する議論が少なくなる中、このような会が開催されたことは意義がある。これからもこのような取り組みを続けていきたい」と話していた。

（建内亮太＝人文学類1年）

# 「イノフェス」開催

## 最先端の科学に触れる一日

筑波大学とラジオ局のJ-WAVEが主催する、「J-WAVE INNOVATION WORLD FESTA 2017 Supported by CHINTAI」が6月3日、つくばカピオ（つくば市竹園）で開催された。

会場には3800人が来場。最先端の科学技術を体験できる展示が多数出展された。また、音楽家の小室哲哉さんらによる音楽ライブやジャーナリストの田原総一朗さんによるトークセッションが行われ、会場を沸かせた。

科学技術と音楽を掛け合わせたビジネスプランを全国の学生や若手社会人らが競い合う「EDGE INNOVATION GROVE AWARD～FINAL STAGE～」では、予選を勝ち抜いた3チームがプレゼン。実業家の森川亮さん（昭和63年度情報学類卒業）や落合陽一助教（図情メ系）らが審査し、作曲を気軽に体験できるソフトウェアを提案したチーム「My Melody」が優勝した。

ステージのフストを飾ったのは歌手のきゃりーぱみゅぱみゅさん。体に取り付けたセンサーが反応し、動きに合わせて背景の映像が変化する演出や、持ち前の歌唱力などで超満員の観客を盛り上げた。

また、筑波大からもステージ出演やブースの出展があった。岩田洋夫教授（システム情報系）らのチームが製作した5㍍の巨大ロボットの試乗体験では体験者の動きに合わせてロボットが動き、来場者の注目を集めた。

来場した男子学生は「日頃できない体験ができた。来年も参加したい」と話した。（石川泰行）

パフォーマンスを披露するきゃりーぱみゅぱみゅさん（6月3日、つくばカピオで）＝主催者提供

# リレー・フォー・ライフ 開催

## つくばでがん患者支援のイベント

がん患者と支援者が交代で24時間歩き続けるチャリティーイベント「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2017茨城」が5月20、21日、研究学園駅公園（つくば市学園南）で行われた。つくば市での開催は8回目で、がん患者やその家族など約1700人が参加した。筑波大学からはアカペラサークル「Doo-Wop」などがステージでパフォーマンスを披露したほか、学生ボランティアがイベントの運営に携わった。

リレー・フォー・ライフはがん予防とがん患者の支援を目的に1985年、米国で始まり、現在25カ国に広がった。日本では2006年に初めて筑波大陸上競技場で行われ、今年は茨城県を含む37都道府県で開催される予定だ。

参加者らは20日午後1時ごろに公園内に設けられたコースをスタート。コースの脇には、慰霊の思いを表した行灯「ルミナリエ」が置かれ、参加者の足元を照らした。ルミナリエには参加者からのがん患者への励ましの言葉や、がんに立ち向かう患者らの決意の言葉も書かれた。

関係者によると、24時間歩き続けることは「がんとの闘いは24時間眠らない」というがん患者と家族、医療従事者の苦労を象徴している。当日は、患者と支援者が共に夜通し歩きながら話をし、参加者は「患者やその家族を支え続ける」というイベントの趣旨を再確認していた。

一方、20日夜にはがんで亡くなった人を偲ぶセレモニーも行われた。参加者は、椅子に座らないことで、がんの犠牲者への思いを表現する「エンプティーテーブル」を囲み、黙ってろうそくを捧げた。会場内にはフードコートや足湯、整体などが体験できるブースなども設けられたが、ブースの出展や参加者の募金など約93万円は、経費を差し引いた全額が日本対がん協会に寄付されるという。

実行委員を務めた黒川真臣さん（環境BM2年）は「人とのつながりを感じることができるイベントで、これからも委員を続けていきたい」と話していた。（鈴木瑞穂＝人文学類2年、写真も）

がん患者やその家族への支援を訴える参加者ら（5月20日、研究学園駅前公園で）

# 「ひよっこ」トークショー 出演者ら 撮影秘話を語る

茨城県が舞台の一つになるNHK連続テレビ小説「ひよっこ」（月～土 午前8：00 総合ほか）の制作秘話を語るイベント「連続テレビ小説 ひよっこ キャンパストークショー in 筑波大学」が5月31日に春日講堂で開催された。主人公の幼なじみである三男の母・きよ役の柴田理恵さんと、制作統括を務める菓子造さんがゲストで登壇。「働くことは」をテーマに現在の職業に就くまでのエピソードなどを披露し、会場に集まった約350人の観客を沸かせた。

「ひよっこ」は、戦後の高度経済成長期に、茨城県から上京した主人公がさまざまな人と出会いながら成長していく姿を描いており、授業の一環としてイベントが企画された。

イベントでは柴田さんらがドラマ制作の裏話や茨城県の魅力などを話したほか、柴田さんが登場するシーンをまとめた映像も流れ、ユーモアあふれる演技に会場が笑いに包まれた。

終盤の質問コーナーでは、「仲間を引っ張っていく方法を知りたい」という問いに、菓子さんは「仲間と誠実に向き合うことが大事」と返答。来場した女子学生は「制作の舞台裏を知ることができ、今までとは違う視点から作品を楽しめそうだ。今後の展開もますます楽しみだ」と話した。

また、ドラマの出演者の等身大パネルやサイン色紙を展示する「ひよっこパネル展」も5月24－31日まで7B棟で開催され、多くの来場者でにぎわった。パネル展は茨城県内7大学を8月7日まで巡回しており、今後は7月11－18日に茨城キリスト教大学、7月19－26日に茨城大学、8月4－7日に筑波技術大学で展示される。入場は無料。（佐々木悠里、12面に関連写真）

# 春季スポデー 4249人が参加

春季スポーツ・デーが5月13、14日に筑波大学の中央体育館などで行われ、学生や教職員4249人が汗を流した。

初日の13日は朝から雨の悪天候。このためソフトボールなど一部競技で会場変更や規模の縮小があったが、2日間通してバスケットボールなど7種目が実施された。また、玉入れや吹矢など当日参加ができる「学生委員会企画」のほか、体操部や馬術部などによる体験教室や公開試合もおわれた。

14日行われたハンドボールに参加した森永絵里さん（日日3年）は「久しぶりにスポーツ・デーに参加できたので楽しかった。2日目しか参加できなかったので、次回は全日参加したい」と話していた。（徳永爽、12面に関連写真）

## 訂正とおわび

335号10面のグローバルヴィレッジの記事で、「日本人学生218人に対し、留学生は41人」と記述しましたが、正しくは「日本人学生213人に対し、留学生は42人」でした。おわびして訂正いたします。

# つくばテーブルゲーム交流協会

## 人をつなぐテーブルゲーム

あるこう 未来会議 tanbo

頬を撫でる風が気持ちよい5月のある夜、Tsukuba Place Lab（つくば市天久保）では、数人の学生らが真剣なまなざしでテーブルを見つめていた。視線の先にあるのは「運命」や「雨」など単語が書かれたカード。一人が曲を流すと、部屋には緊張感が増す。流れている曲の歌詞中に「君」という単語が現れた瞬間、同じ言葉の書かれたカードをとる。行われていたのは歌詞でかるたをする「狩歌」と呼ばれるゲームである。「夜のゲーム会」での一コマだ。

活動は月約3回ほど。参加者は、大人数で遊べばかりで、会員は6名と少ないが、会員以外とテーブルゲームで遊ぶことも多い。BiVi つくば（つくば市吾妻）で月1回ほど開催している海外のボードゲームから個人制作の同人ゲームまで思い思いのテーブルゲームを持ち寄って遊ぶ。昨年12月に発足した「駅前ゲーム会」では、会員でない学生に加え、幅広い年代の人が訪れるからだ。会員の野崎凌太さん（比文4年）は「テーブルゲームは言語や世代を超えて、交流できるのが魅力。駅前ゲーム会では親子連れから仕事帰りの人まで、さまざまな人とゲームができる」と楽しげに語る。

テーブルを囲んでゲームをすれば、初対面でも会話が弾む（4月10日、筑波大学サテライトオフィスで）＝同協会提供

魅力はそれだけにとどまらない。代表の高野大さん（比文4年）は「テーブルゲームをしていると、プレーヤーの性格がよく表れるといい、同協会で定番の「ペンギンパーティー」を紹介してくれた。

5色に分かれた手札をピラミッド型に積み重ねるように並べ、より早く場に出した人が勝つ。出せる手札は隣に接した手札と同じ色でないといけないために、出せる手札の色は減っていく。相手の持つカードの色を予測し、いかに相手にカードを出させないかを考えることが勝負の鍵だ。

「協調性がない人が集まるとピラミッドを作ることが難しくなり、ゲームがより面白くなる」（高野さん）。

テーブルを囲んで、直接相手とコミュニケーションをとることでゲームにより深みが出る。相手が初対面でも、ゲームを通じると、その人の人となりを知ることができるという。

また、高野さんは「つくばは世界中から研究者や学生が集まる多様性がある街だが学生と市民の交流の場が少ない。目標は、10年後つくばをゲームで気軽に交流できる街にすること」と夢を語る。

「会員になってもいいですか」。ある日のゲーム会でテーブルゲームの魅力に気づいた人がまた一人、同協会に入った。テーブルゲームがつくばをつなぐ日もそう遠くはないだろう。（鈴木瑞穂＝人文学類2年）

# Who's Who?

NPO 法人ドットジェイピー学生代表

## 石原田 拓郎さん（社学４年）

イベントで挨拶する石原田さん（5 月 22 日、衆議院議員会館で）＝本人提供

若者の投票率向上を目標に活動するNPO法人ドットジェイピー（本部・東京都千代田区）の学生代表を4月から務める。全国約500人の学生スタッフをまとめ、団体の知名度向上を目指して活動している。

同団体は1998年に設立。選挙啓発イベントや春と夏の長期休みに、学生が議員の下で議員同士の勉強会への参加などを通して社会と政治のつながりを学ぶ、議員インターンシップ（インターン）などの運営を行っている。

同団体の存在を知ったきっかけは1年生のとき。授業の合間に行われた、インターンの参加者を募る告知だった。大学入学前から政治に興味があり、その年、夏のインターンへの参加を決めた。インターン先の市議会議員事務所では、市民に街への不満などに関するヒアリング調査を議員と一緒に実施。調査結果をもとに信号設置を求める一般質問案を考えた。「自分が作成に関わったものが議会で読まれ、実際に設置されたことが印象的だった」と当時を振り返る。

当初はインターン参加のみを考えていたが、団体が学生のみで運営している点にも興味を持った。そのような中で運営をしていた先輩に「君の力が必要だ」と誘われたことがきっかけで、7月には千葉茨城支部のスタッフになった。インターンを9月に終え、10月からは次の春期インターンに向けた活動を本格的に開始。議員事務所を回り、インターン生受け入れの交渉を行うクライアント部署に配属された。しかし配属当初は任される仕事をこなすだけの日々が続き、活動への意欲が次第に薄れ、一時期はスタッフを辞めることも考えたという。

そのような中で転機が訪れた。インターン参加者の増加により、所属していた支部が、千葉支部と茨城支部として分離独立することが決まったのだ。これを受け、多くの同期スタッフは茨城支部の立ち上げメンバーに名乗りを上げ、独立準備に奔走し始めた。その姿を見て、「支部の立ち上げという困難に挑めることにわくわくしたし、独立に向け、精力的に活動する同期の姿を見て自分も結果を出さないとやめられない」と感じ、活動を継続した。

### 立場をどう使うかを意識
### 団体の知名度上げたい

2年生の4月に茨城支部としての活動が始まると、その当時1人もいなかった茨城県内の受け入れ議員を十人で次々と開拓した。訪問前には、その議員が力を入れる政策分野から趣味などの私生活の部分まで入念に調べた。地道な努力が功を奏し、10人以上に行った交渉は全て成功。「ある議員から『君に会えてよかった』と言われた時が活動を続けてきてよかったと感じた瞬間だった」という。

その時の活躍が評価され、全国のクライアント部署を統括するマネージャーなどを歴任。そうした中で「この団体の知名度をもっと高めたい」、「全国のスタッフをまとめる経験を将来に向けてしてみたい」という思いを抱き、今年4月に学生代表になった。

学生代表として活動する上で、「規模が大きい組織では、代表の発言がほかのスタッフに与える影響力はかなり大きい。だからこそ代表の立場をどううまく使えばよいかをいつも考えている」と話す。

就活と授業の忙しい合間を縫って全国の支部を飛び回り、スタッフを激励する際には、ただ厳しいことを言うだけではなく、相手が次の行動につなげられる言葉を選ぶように心がける。また、学生団体の合同イベントや議員の勉強会などにも数多く出席し、団体の知名度向上にも奮闘している。「議員インターンで2カ月間も議員と過ごす経験は貴重だからこそ、このインターンが持つ価値をさらに高めたい。将来的にはこの団体のインターンへの参加が大学生のステータスと呼ばれるようなものにしたい」と意気込む。

全国に展開する団体の知名度をどう上げるか、あくなき挑戦は今日も続く。

（石川泰行＝社会学類3年）

## 編集後記

今回の新聞を制作しながら、ちまたのニュースでは東京都議会選挙の話題で持ちきりとなっていました。今回の都議会選の投票率は5割弱と前回の都議会選よりも上昇したものの、高い数値とは言えません。特に若者の投票率は気になるところです▼学内に目を向けると中央図書館内に設置された期日前投票所の利用率の低さが明らかとなりました。担当者の印象では若者、とりわけ学生の利用者が少なかったようです。学生の呼びかけで、設置が決まった投票所の未来は私たち、若者にかかっています▼若者への期待は政治の世界だけではありません。筑波大の中だけでも男子バスケ部の馬場雄大（体専4年）が6月にプロ契約を結び、蹴球部はJ1のチームから大金星を上げました▼こうした若者の活躍を「学生ファースト」の視点でこれからも追っていきたいと思います。（副編集長・岡田優太＝社会学類3年）

次号は
**10月2日（月）**
発行予定です

## 学芸

### リボーン・アートボール展

ボールに絵を描いた作品を鑑賞する来場者（6 月 16 日、大学会館で）＝岡田優太撮影

5 面へ

## スポーツ

### 競泳ジャパンオープン

男子 200 ㍍平泳ぎで 5 位入賞を果たした大久保琳太郎（5 月 21 日、東京辰巳国際水泳場で）＝明石尚之撮影

8 面へ

## 学生生活

### 春季スポーツ・デー

ハンドボールでゴールを狙う参加者（5 月 14 日、ハンドボール場で）＝徳永翼撮影

11 面へ

## 学生生活

### 「ひよっこ」トークショー

ドラマ制作の裏話を話す柴田理恵さん（5 月 31 日、春日講堂で）＝佐々木悠里撮影

11 面へ